

川柳の雑記



麻生路郎女主人

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿五年七月一日第三種郵便物認可

(毎月一回一日発行)

創刊大正十三年・通巻三百九十八号

七月號

No. 398

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

400号記念事業の一つ
誌壽400号記念川柳大会

とき 九月十一日(日)午後一時
ところ 大成閣 電話☎5238~9
南区大慈寺中五丁目二六
心斎橋大丸北ノ辻東五〇米北側

兼題 「発展」2句 岸本水府選
「思出」2句 楢元紋太選
「飲み仲間」2句 堀口塊人選
「巨人」2句 布部幸男選
「よろこび」2句 中島生々庵選

席題 三題当日発表(各題2句宛)
柳話 麻生路郎
呈賞 天地人
(詳細次号で発表)

会費 百五十円
懇親宴 五時閉会后同会場で会費350円

出句〆切 8月31日日本社着便
(投句は郵券30円封入 8月31日〆切)

大阪市住吉区万代西五ノ二五

川柳雑誌社

電話☎6081番

川柳雑誌社主催

本社七月句会

日時 七月七日(木)午後六時
場所 未生会館(電話☎二二一三番)
ナンバ高島屋西横バス停前
浪速区新川二丁目六九一

兼題 「辞書」(二句) 麻生路郎選
「見晴らし」(三句) 西尾 栞選
「手真似」(三句) 川村好郎選
「几帳面」(三句) 八木摩太郎選
三題(当日発表) 中島生々庵

会呈柳席 兼題
費賞話題
百円 ☆各題天位 ☆路郎選天位に不朽洞賞

★投句だけの方は郵券三十円
同封(〆切七月五日)

8月本社句会兼題

外見、手製、景色、テーブル

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電住吉☎六〇八一



あなたの句帖が
出来ました

★路郎好みにだけ、すばらしく気が
さいています。句会でお使いになる
なり、抜けた句の整理にお使いにな
れば、何冊かで、あなたの句集の礎
稿が出来ます。又柳友への贈答に、
句会の賞品にも最適です。是非ご利用
下さい。

一冊五五円・送費八円・十冊五〇〇円

大阪市住吉区万代西五ノ二五

川柳雑誌社

電話 大阪☎六〇八一
郵替 大阪七五〇五〇番

麻生路郎著

好評噴々



川柳の味い方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から
川柳を手がけているというから
川柳歴はもう五十五年にもなる。
この新著は麻生さんが毎月出し
ている「川柳雑誌」に掲載された
ものを中心にして他の柳誌や句集
からひろった五百六十三句につい
て、ひとつひとつ丁寧な注釈を加
えて、鑑賞の手引に資そうとした
ものである。

句の方より実はその鑑賞文の方
がなかなかうがって、一気に
読ませる魅力がある。

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五丁目二五番地
電話 大阪☎六〇八一
郵替 大阪七五〇五〇番

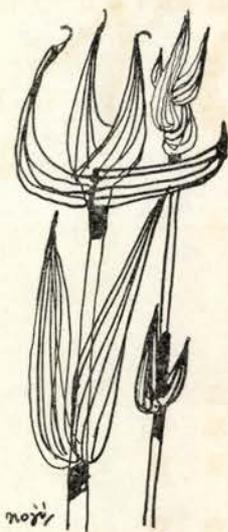
価二五〇円

送費三二円

B6版
二五〇余頁

不朽洞句帖

麻 生 路 郎



不幸にも気も狂わずに首相いる
私邸まで鉄条網は哀れなり

薄のろであつてもデモの一人なり

デモとストの日本

天皇はつんぼ棧敷でみそなわし

お互いは日本を売ったことになり

ジャングルのない日本にっぽんをさみしがり

鏡 百合 たれも来す

妻よ踊れ残こんの色香ほのほのと

お互いにアクセサリーの老夫婦

ダブルベッドを求む りみびと寝たいばかりに

川柳雑誌七月号目次

不朽洞句帖	麻生路郎	(3)
沙漠の中の英雄	東野大八	(4)
虚子俳話をめぐって	早川清生	(16)
赤染衛門と周防内侍	富士野鞍馬	(18)
一句に賭ける	戸田古方	(26)
海水浴と耳疾患	尾崎方正	(15)
句評リレー	有為郎・博也 薫風子・旭童	(12)
句評に寄せて	直原七面山	(20)
川柳夫婦善哉	丸尾潮花	(28)
名句は跡継ぐ	河本南牛史	(35)
娘・妻・母	小石・若菜・梨花	(30)
紳士とハンカチ	直原七面山	(27)
絵と川柳で表現する歴史	戸田古方	(32)
★飛燕往來	速木真珠洞	(5)
新おくりがな	不二田一三夫	(33)
川柳塔	麻生路郎	(6)
同舟近詠	諸家	(11)
近作柳樽	麻生路郎	(20)
金地泥集	北川春巢	(20)
各地柳壇	麻生路郎	(20)
入門講座	清水白柳	(34)
柳界展望	清利	(38)
★不朽洞会から	清利	(39)
一路集「世渡り」	尼緑之助	(36)
「婚期」	真鍋一瓢	(37)
パンの散歩	高橋操子	(46)

題字……麻生路郎・表紙……戸田古方



(著者)

沙漠の中の英雄

——革新川柳家の現実ということ

東野大八

さる五月三日岐阜市で第四回現代川柳作家連盟の集いもたれた。柳界の論客をもって自他ともに許す石原青竜刀氏も加わり地元世話人として今井鴨平、清水旺夕の両氏（いずれも地上派同人）をはじめ関東、関西各地から約二十名近くの革新川柳人が合同した。ほくもこの集りへ青竜刀、鴨平両氏の推ばんでオブザーバーとして招かれる光栄に浴した。

午前中は一般的な会運営事項について協議、午後から討論という段どりでほくが顔を出したのはその討論の部だったので有難かった。

まず青竜刀氏が得意のシンラッな柳壇評を試み、曲角にきた革新川柳の生きる道をP R方式への推進と、作句上の課題とし

て川柳なる名称を他の適切なものに改めるべきだ」と提唱した。終って片柳哲郎氏（天馬）が意気さかんに柳人の作句コースについて一席ブツッたが、その要旨をかいつまんで書くとつぎの様なあんばいである。

川柳作家の一つの道には十の段階がある。その第一は、作家になると活字になることを無上の喜びとする。そこでおのずと自己満足が生れてくる。それが進むと第三の症状である自己忘却がはじまる。この自己欺瞞のハシリは一つの川柳運動に投入する道に進む。かくてそこに横たわる問題が自己批判というやつで、初手からその段階におよぶ過程に対して自分はどういう満足を得たか。ここでつまらなくなると考える柳人は、川柳界から去っていく。とこ

ろがこれを切りぬけて第六の段階に入った人となると川柳の第二期症状に入り、ヤマイコーモー的自己満足にひたる。するとやがて作句面に対しても柳界に対しても一言半句の何かを持ち合わすようになる。これが一段と深まると、人を尊敬させ、わが意に迎合させることを考えるようになる。つまりおのれの配下の純出をのぞみ、息のかかった同系列のものをほしがっていく。ここにおいて完全に横のつながりのない個の英雄と化していく。抱擁力のないその十七字の亡霊は、やがて沙漠の中の英雄と化し果てるのだ。

以上が哲郎氏の論旨で、これは多分にこの人自身の体験に基づくものの様だが概して一般論に過ぎない。ただこの論旨の面白

味は最後の「沙漠の中の英雄」にあるとほくはみた。その後の青竜刀氏や雨宮八重夫氏（次元）宮田あきら、暴作二郎、片柳哲郎、松本芳味両氏（以上天馬）今井鴨平、清水旺夕両氏（地上派）紅一点の滝元喜美（川柳）の席上における論旨は、現川連の運営について入門的の性格をすて、革新川柳の作品価値を一柳界に止まらず広く世間にそれを打ち出し他の文芸のジャンルの中に大きくその存在を知らしめるべきだということに落ちついたようだ。結局ここには新人待望の積極的な歩ひろめ工作はなく、既存の柳人の作品価値に重点をおき、現川連の設定をはかりそうした作句活動を一段と推進しようということにつきたようだ。この場合、ほくの興味をひいたのは、席上にある毛利満若君が、芳味、哲郎両氏の舌ほうに仮借なきまでにたたきのめされたことだ。満若君は「遺児百句」を刊行して、それが岐阜市長の出版費の負担もあって大いにマスコミの座に乗った。その作品価値をさきの両氏は、革新川柳理論なるものでまだまだ君の詩魂は甘い、もっともっと活字にする以前の場において苦しむべきだ、と言葉はげしく論結した。「天馬」独得の厳運主義の性格がここに明確に打ち出されているのは興味深い、青竜刀氏が「さきの川柳P R理論を地で行く満若君は、その点

において功績があるのだから、第二回現川連貫は彼に与うべきだ」とませつかえし若い連中を苦笑させたが、御年配の高木夢二郎氏（川柳人）もまた暗に満若君の人間の立場に同情的な形をとっている。川柳は入りやすく、それだけにまたつき放されやすいものだ。酔っぱらいの酒のみのように死ぬまで川柳をやめられないものだけが、満若君の在り方をコピーするものだ、と。

革新川柳が曲り角にきていて、それを今後の現川連はどう対処していくべきかが、当日の命題だったらしいが、固め八目的ほどの感慨からするとその結論は何もつかめていない。文学川柳至上主義をかかげ、自意識過剰気味の革新川柳論が排他的狹小さで対論されているにすぎなかったようだ。

革新川柳の難解さが、当日も問題になったけれども、その切実な理論的解明が談論風発の最中だったにもかかわらず論議されなかつた。この派の対外的PRとか作品価値を世に問うとかの、せん鋭的な論旨が威だけだかに行われていても、この難解性の要点的解決がなければ話の他というものである。満若君はじめ、川柳入門を志す数人の人々も居合せていたが、そうした点について一顧も与えられず「なんと川柳は難しいもの」という風なうかぬ顔でその人たちは帰っていった。川柳は現代詩だ

が、一般的な環境が求めるものは「胸うた人間のうち」にちがいない。このうたの裏づけは人間生活の実験と方法である。これを忘れた川柳詩は今の世のものではない。今日の伝統本格川柳の規格の弱さは日常生活をそのまま書いているところにある。そのかみの叙情詩人の単一さは、外部現象の表現に重きをおいて内部的な複雑な表現技法をきり離してきた。これがそのまま安易

に持ちこまれていくのが伝統本格であるのだが、それにあきたらない気持は判つても、独善孤高の自分一人の革新川柳を型づくるとしても底の浅さは限界がある。句は一句ですむものではないからである。世間に判つて頂こうとする句の難解な表現の求訴力は、複雑な当節の人間世界を自らの実験の度合をつみ重ねて行くしかない。ここにこそ行手もハッキリしたイバラの道が通じはじめるのである。単純な詩感覚がその表現の実験の場において安易にそのままと出された難解性には詩はなかくたもない。

それが現実の生活面におけるミュージック相題の苦しみをどうしようもないままに煮つめて単一にかえし、ぎりぎりの一句の形でとり出す。この場合は、最早イメージの結晶であって必ずや共感を生み出す。ここには句の難解さはすでない。より多く、より深く重ねひろげて追及しぬいた複雑なもの

の単一さというものは、すべての素材のエキスを集めてくみあげる高価な一さじのスープのように味付のコクがあるものなのだ。要するに、より複雑なもの単一化がどうあるべきかということに句の難解性のポイントがある。それは何も革新川柳の専売ではない。エリオット風に気負い、柳界のカール、シヤビロを気取ったような一部革新川柳派のほんやく文学流の詩表現的マヤカシに今の若い新川柳人はエリ首をつかれてふり回されているのではないか。日本人の中に生きていく木線や木肌や漬物の味覚にもわれら人間世界の身近な詩感は無

限にあるはずである。この場合、居候や下女などという古典的俗語の中にすら今日のニュアンスにはるか遠くとも人間社会のエスプリの中にハッキリと息づいているのである。

要は芭蕉のダイナミックな俳境が東洋古典詩の神秘性とあちらでは高きいわれているのもその人間追求が巨大な人間層の一部を口過し、その一句に心魂をこめて表現されていると考えられるからである。

難解さに難解さを徒らにつみかさね、苦みの顔をしかつめらしくしている底の浅い一部

革新川柳作家の独りよがりこそ、オアシスから見はなされた沙漠の中の英雄といふかはない。しかもそれはメチールに酔った明日も知れぬドキンキホーテであるかもしれない。

飛・燕・往・來

★速水真珠洞氏（福門）から

——路障

病後の試練に、雲仙・島原へ旅立ちました。六月十五日から十七日に帰福しました。雲仙はカラリと晴れた日の名山ですが梅雨期で夏雲が多く、最高の普賢岳も見えかねました。長崎の柳人の建てた川柳句碑があります。

雲仙で阿蘇の煙も見えて帰りました。遠望のきく名所です。天草・島原はクリスチャンの旧跡の多い所です。

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも 心に
くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



ば橋条
ん本
な日
ん四
大東
東京
京都
高島屋



兵庫 戸倉 普天

ニタ晩目少し静かな酒となり
田を鋤くに又瘦せ牛をひっぱたき

豊中市 戸田 占方

しがんだのように花びらひつついて
金も女も地位もしんどいものばかり
うるさきかな民主政治とかいうて
無駄にとっくり一寸ふってみる

資本主義の恩になつても思ひ

大阪市 西尾 榮

バラソルの中は五十のアベックさ
後戻りして妻は念押しすぎ合せ
国訛りのきついところを信用し

西宮市 若本 多久志

今に今にと女房かしすけど
ハンガーストへも医者仁術の脈をとり
常務専務社長と順に脊が低く

大阪市 正本 水客

魚島に父の写真のちりはらう
割箸も割つてもろうてする茶漬

大阪市 丸尾 潮花

仁丹を子供の口にひろわれる

ビニールの袋のままで吊る金魚

どっちから寄り添うたのか手をつなぎ

大阪市 西 いわを

未だ青い果物と云う彼女

年老いても日曜大工出来ぬ性

退屈な男にさせて逃げられる

売り急ぎせねばよかつたビルの横

岡山市 武部 香林

平常着で行ける桜をうれしがり

ソ連米機撃墜

うちとこをのぞきよつたと煮え湯かけ

信頼にたえんとして身を削る

過去帖の余白はわが名印すところ

大阪市 北川 春果

ゴム長は足許見るを忘れとり

勇退をしたその日からケチになり

提げ鞆女の肘の強さ見る

月給で男を見てる女事務

大阪市 須崎 豆秋

息抜きの気のイーチャンが明けかかり

剃刀がヒヤヒヤとする話ずき

ワイシャツのサイズが合わぬ鶴の首

新緑が臍まで染まりそうな雨

心気一転依然として元の椅子

老人の夢一つ消え一つ消え

抵抗期我子乍らもむつとする

夢賭けた子がデモ隊の先に立ち

親にまで嘘を吐く子に育て上げ

奈良県 尾崎 方正

里帰りもう一晚の電話受け

濡れながらほそほそ歩く花の雨

年輪の差新妻へ逆らわず

堺市 吉田 圭井堂

縁談は汐の満ち干の如くにて

呼び出しのサンブル女将かけて見せ

山口県 国弘 半休

天性のその張つたりひっかかり

白桃のようにとおのが娘をおもい

共稼ぎ母が驚くほど月賦

でこぼこの人生で良しトタン屋根

防府市 長野 井蛙

儲けたか新築凶入りで知らせてき

祝日は取るが国旗は出し忘れ

立膝になって女も敗けていず

岡山県 直原 七面山

青い目の客がバクつく握りずし

堪能した顔でアベックポット降り

せめてもの抵抗税金滞納す

ただ一人土堤を歩いてる失意

大阪市 西森 花村

幸福を願って身を退く女もい

吉と出たみくじ見せたい人があり

チリメンジャコみたいにラッシュもり

頭から出る声もある中国語



ワッショイワッショイおやつ頂戴の真似
空ばかり見て悪態をつく米ッ

鳥取市 河村 日満

学生の席をねらって横に立ち

ピカドンの記憶で話すきのこ雲

社長渡欧に

何よりの土産元気なまま帰り

豊中市 足立 春雄

文化住宅探した果の靴の泥

絵か字かも表装だけは立派なり

独裁が未だやめられぬ血気もち

加賀市 野村 味平

駐在日記

伴淳の巡査もあきぬゴールデンウィーク

赤阪の疲れ難段あくびする

天皇の記事で誤植を見つけられ

大阪市 木村 水堂

会期延長喧嘩する日も組んであり

大臣の顔は君子に縁遠く

嘘をつく口を合せる控室

都市計画浪花情緒をまた削り

折れるだけ親が折れる生さぬ仲

高槻市 福田 丁路

無法者時代の波に乗って生き

靴下の穴を気にしてかしこまり

大阪市 真鍋 一瓢

三十娘へきまった蒲柳の婿さまよ

あの若僧がと思えども子の教師

気が遠くなるよな値だが娘の望み

大阪市 後藤 梅志

天神の牛鼻が欠けてるのも淋し

おお雀にも喧嘩がある喧嘩がある

あんまり商売気が露骨だね小説

日通と間違えそうな肥やし汲

ゴーストアップ待って呉れる顔でなし

米子市 小西 雄々

着飾って遊ぶお金に不自由し

子供会ボスの息子がする議長

野心家の蔭の努力におそれいり

大阪市 山川 阿茶

惜しまれて片道切符の旅に出で

辛抱が無うて死ぬ死ぬすぐに出る

いい年をしてて手伝う気もつかず

黒髪によき外人に見なおされ

大阪市 金井 文秋

雇われる方がくわしい労基法

顔ばかり写して飽きもせぬカメラ

マネービルどころか長女二女三女

加賀市 那谷 光郎

二三枚日めくり残して夜逃げされ

心気一転させたい友へ飲むとする

恋序曲映画の話して別れ

岡山市 浜田 久米雄

煤煙の汽車見納めの汽笛なり

この町に電車が走る旗を立て

電化してすこし働く気を起し

いのししの出るふるさとが電化した

大阪市 清水 白柳

五女のぶ子死去

北枕かそけき嵩になりし娘よ

一ト袋のみかんの汁が世の別れ

同級の兄が順番に叩く鐘

病人の床がなくなりガランとし

すまんなど死ぬ子が家計知っていた

出雲市 尼 緑之助

父の死(二句)

恩愛のきずなの切れた九十二才

九十二才お浄土参りのデスマスク

情痴とは遠い花火のかすのよう

女連れ花見帰りの豆しほり

大阪市 水谷 竹荘

満員の尻押しもするアルバイト

柳井市 弘津 柳慶

電焼器でイワシの煙ただよわせ

連休で疲れきったる御出勤

安保改定他人事のように聞いている

腕が上ったナート兄弟久瀧の杯を干し

鳥取市 杉谷 湖山

お務めはマージャンパチンコして遅く

利子で食う身分の計算また忙し

自動車ウヨウヨ人ウヨウヨにもまれて来

京都市 大鶴 喜由

これ以上勘忍えとは紐があり

雑草の丈より低く恋をする



珍しい労わりように妻案じ
子の指を子守が借りて恋の文字

尾崎市 小林 文彦 月

地下鉄でも子供は窓に立ちたがり
青年に席ゆずられる髪になり

奈良県 飯 降三白 香

布教師となった娼妓の色っぽく
割り切つて世の中らしく生きており

P.T.A親の虚栄に利用され

呉市 林 野 魁 光

湯の町の一握手をして別れ

百円の土産で地味な旅終る

コスモスの様な男にいたわれ

岡山県 福 島 鉄 児

塗りかえてポストも春の色になり

恩給が当か同居をすすめて来

下駄をはくことも久しい旅の宿

岡山市 服部 十九平

ポケットに何にも無かった軽死体

偶然を勿体ぶつて神に帰し

岡山県 大森 娘 句 楽

追憶の生めよ培やせが今たたり

代議士が身元保証を買うて呉れ

呑み代をおびやかす程学費要り

兵庫県 若 林 草 右

リサイクル拍手大かたサクラナリ

新婚を祝し(二句)

春うらら二人三脚よく揃い

来年の桜はパパとママで見ろ

広島県 山 田 季 貴

近代化煙出ぬ汽車絵にかかれ

娘の意見入れる暮しは派手に見え

真相は結局金だなどわかり

大阪市 山 本 葉 光

ゴミを焼く煙りここから大阪府

箱庭の琵琶湖を見せた杉木立

岡山県 田 村 藤 波

お賽銭盗られて神さま黙つとり

牛もつと歩けスピード時代だぜ

金貸せと云う先輩の面がまえ

岡山県 岡 田 夜 潮

貴戚なく飲んで戻れば戸が締り

末席に列してもみ手の癖がつき

強いられて声はりあげる素説なり

児島市 本 田 恵 二 朗

記事になる気で心中したわけでなし

噛みついてみたが人柄歯がたたず

京都市 松 川 杜 的

士手は春アイスクリーム売れ残り

セックスの文字に商魂ちらつかせ

長男のスピードボールにちとたまげ

鳥取市 森 本 法 泉 子

酔客をさばいて車掌まだ若し

リーダーの発音を子にわらわれる

岡山市 津 田 麦 太 楼

焼香を終えて花輪の裏を抜け

大臣が一句ひねつた笑い草

社宅街蛙の声に取り巻かれ

椎茸のかば焼庫裡でふるまわれ

吹田市 橋 本 幸 男

儲かりまっかと旧友と戎橋

堺市 高 崎 雄 声

夫婦して互に他人へのろけとき

売家を値段に遠い顔で見る

高根県 藤 井 明 朗

「川柳まつり」に出席して

柳魂の師の長生きを祈るのみ

全快のもう毒舌が出そうなり

日曜の大工は妻に指図され

岡山県 永 松 東 岸

代議士になる気か柔道子が習い

いささかは馬鹿になる気で杉を植え

飲む席へ遠慮しいしい来た酒豪

子を連れて出れば安心して妻

倉敷市 野 田 素 身 郎

ひき逃げはそんな大物とは知らず

転進をしくじり定年まで勤め

仕事がわかるまでは古参を大事にし

大阪市 伊 達 堰 子

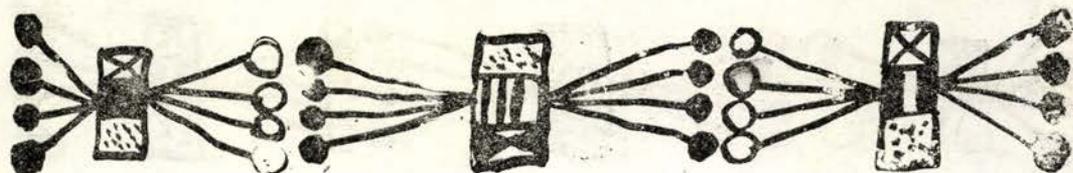
また新車見せつけに来た無駄話

次のバス聞いて巡礼雨へ降り

環境をほめてる団地肥え臭い

民生委殺されともない協議会

大阪市 不 二 田 一 三 夫



上 京

有楽町ここで落ち逢う人もなく

東宝砦まつりへ出席

サーピスも演技のうちとスター酌ぐ

英文の賽銭箱も法隆寺

謙譲の美德は写真の隅で切れ

兵庫県 酒井ひか平

前金を払うてますのや定期券

童の口心行く迄水を飲み

新調の靴爪立てで踏まれたり

宇都市 津秋 六花

おっさん煙草をくんな十七八が

淋しきは育ての親と子がさとり

神戸市 丸川 初甫

本来の気短かかくすハネムーン

大臣の顔に似てても出世せず

趣味も合い似合の夫婦にされる倅

マイク上げ下げ司会者の咳払い

岡山県 池田 古心

雨降れば雨にかこつけ寝て暮らし

利己主義の砂を惜んで稼ぎ貯め

大阪府 早川 清生

躍如たる猥談地方市の署長

植木に凝って旅もようせず

墓あばくことし没後に日記刷る

詐欺の家逮捕にゆけば鯉のぼり

岡山市 武部 若菜

歳月の向う側とはなりける

政治家の留守宅人の影もみず

気の向いた日曜大工下りて来ず

堺市 辻 圭水

すれすれで映倫パスと宣伝し

ストをして大手にやっど近くなり

岡山県 野々口 美舟

桐箱で色あせている巻きたばこ

団体で一つ名所がはぶかれる

電報を電話でできている不安

西宮市 小浜 牧人

大都会あかの他人の顔をされ

一幕ほどの恋だったのが忘れず

五月の風だ金の話は止めとこう

豊中市 菱田 満秋

春風へちちはは恋し一心寺

過去はもう還らずと知る一心寺

悪友の智恵も通じぬ妻となり

兵庫県 前川 左文字

肋膜炎により入院療養

部屋飾りいつまで入院させる気ぞ

それぞれに死斗続ける窓あかり

胸の水引いて呉れそな五月晴

退院の近きベッドのよくしゃべり

大阪市 橘高 薫風子

手紙など書きたき風邪の癒り際

妻の留守食パン真直ぐに切れず

蝶々になるなど毛虫つゆ知らず

下関市 中村 九呂平

目刺し焼き焼き文化賞などけなし
嫁きおくれ毎日まゆげ画いて出る

大阪市 西川 晃

悪まれたままで大往生を遂げ

邪魔物であれば親さえ殺す気の

猫みたいに万引音も立てず消え

釜ヶ崎風景

中風になっても盗みぐせ止まず

昏昏と眠る女の手の麻薬

名古屋市 野田 一念

スタイルがどうのと無理を云う女

男なんていりませんのがする見合

岡山市 林 葵丘

金のない慰安旅行はもう眠り

ロケーション斬られる役は荷も担ぎ

もうビールええなと退社五分前

広重の雨が降ってる昼祇園

富士の嶺大観画く雲が湧き

神戸市 仲 どんたく

待ちましたと社長のゴルフ談議

バーの隅はげの見えない席に居る

子の位置にテリヤがすわる二号宅

死なばもろとも息子の運転

平田市 久家代 仕男

法要が済んで和尚も君と僕

二号さん遠い昔の三味を持ち

大阪市 本多 柳 志

京弁で来ても集金寄せて去に



敬妻家でんネとうまく敷いてはる

野崎 参り

野崎サン日傘の上へ蟬が鳴き

出雲市 原

独 仙

宅の主人主人と上手に敷いて居り

先生の悪口聴いてるポブラの木

大阪市 大谷 月 都

病人は猫のようなり雨を知り

もっともらしい嘘になさいと金を貸し

岡山市 江 国 幽 谷

力入れていたら娘さんでなし

美人だとほめて続きの語に困り

岡山市 光 好 陽 子

春雨にネオンがかすんで人恋し

お帽子にハイヒール四十には見えす

西宮市 河 相 す、む

御馳走やなあと記念日忘れてる

たまに水やった夜なかの雨の音

あさましと思う日のあり蠅に似て

ペンネーム本業よりもよく稼ぎ

西宮市 野 呂 鶴 汀

食うための職業を気楽やと言われ

子の視線たどれば初夏のアドバルン

西宮市 樋 口 舟 遊

税務署が間違えたのにあらためず

新潟県 高 野 む じ な

染めて居た髪と気づいた父を視る

精薄兄先生にだけ通じる語

肉親としての嫌らしさへ黙す

先生の酔うたをクラス中が知り

婦人雑誌ちよっと亭主の味方もし

大阪市 欄 蘭

質より量二級酒二杯飲んでおき

大阪市 石 倉 旅 風

押せそうで知性が邪魔な横車

来るものがやっぱり来たか李承晩

山へ来てまでも利己主義花を折り

椎の実が落ちただけなり山の昼

癖真似てみてもやっぱり弟子は弟子

大阪市 魚 住 満 潮

純西成界わい(五句)

背の子も朝から何も喰べていず

天皇誕生日でも地下足袋はいて出る

顔洗ろておいでと女突放し

東京から徒歩いて来たと言う男

齢七十七夕刊売で世を終り

大阪府 林 昌 男

手袋の白さ欠伸も美しい

朗らかな一家音痴な子が一人

愛媛県 村 上 旭 童

豪快に春泥をけりダンブカー

八十の抵抗食わずねてしま

厘毛をはじくと見えぬ切花屋

早寝早起き別に働く訳でなし

出所する子へ買うという合成酒

見込みがないとは出戻りのきつい事

倉吉市 大 前 鳴 悦

蓄める気になったか妻の小うるさく

鯉のほり下はオムツがひるがえり

生きているだけの身体へ酒もいり

立膝になって女の生きる道

鳥取市 北 村 三 歩

アリバイになるやも知れぬ日誌書く

無視をするつもり事後承諾などと

神戸市 傍 島 静 馬

連休に小雨が欲しい百貨店

不肖の子おやじの顔で飲み歩き

学生が好きな教授で世にうとし

笠岡市 木 山 遠 二

政治家が正直者に憎まれる

政治家と地震と人參とが嫌い

日日好日豚と鶏とを可愛がり

年寄に愛され若いのを愛し

科学の世月に敬称などいらす

大阪市 中 谷 ハ ナ 子

おばあちゃんテレビタレント皆おぼえ

姫路市 植 村 客 遊 子

どなたにも取られたくない人が出来

広告を訪えば小使兼社長

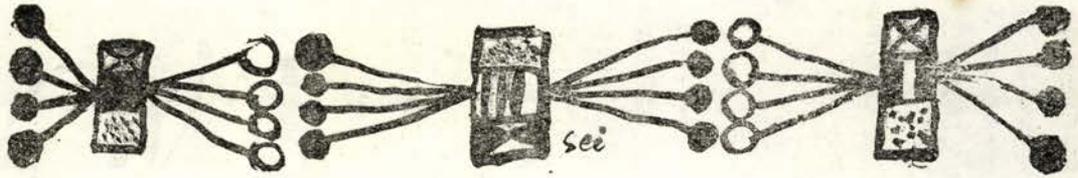
岡山市 宗 高 矢 寸 志

色を捨て金がすべての後家を立て

ツンとして秘書は社長の肩を持ち

似合わない髭をユーモラスに残し

大阪市 河 井 庸 佑



歩いてる時だけ遠足降られとり
食うために振った赤旗処分され
有名校というのですしづめがまんする

大阪府 谷 沢 好 祐

やれやつと寝かせば宣伝カーが来る
先生の訛りも真似て幼稚園

泉大津市 高津 徹 也

政治論ぶって暖簾を出た夜寒
泣寝入りした子へ継母の自問自答

愛媛県 榎 紫 光

降鼻術して三面鏡欲しくなり
倅せを祈って見たが少し妬げ

勉強見てもらって好きになりかかり
眼が合っただけで楽しいのも恋か

青森市 工 藤 甲 吉

歌手になるような娘もなく貧し

社会部長となる

事件記者家へ帰ると始発が出

シグナルの赤にいらだつ事件記者

西宮市 門 永 三 舟

新婚に当てられバスがまだ来ない

あの頃があったねと妻つぶやきぬ

返事位したらどうかと倦怠期

玉野市 伊 原 明 林

ただ一度殴っただけが里に知れ

ラジオ止めなさいと将棋負けかかり

現金を持つ出張の固い膝

寝ころんで客の残した菓子を食べ

ヌードモデル国には病める母が居り

大阪市 藤 村 梨 花

かたくなな心も金にゆきぶられ

鏡ふくついでににきびつぶされる

たまさかに酔えばこんなきれいな夜

府立修徳学院見学

花作る子に人生のきびしすぎ

帯へやる手の美しくころも更え

松江市 小林 孤 呂 二

寝てる見へ敷一匹も寄せつけず

酔うて帰れば兄のビエロになってやり

ほんとうの寝息きこえる三等車

妻の客結構ビール飲んで呉れ

神戸市 室 田 千 尋

女の子と遊んで意気地なく育ち

反古の中母が習うたペン習字

月末の辛さ気付かぬ夫なり

豊中市 林 夢 虹

バラの香のむなしくうせて君は来ず

五十銭銀貨よ明治はよかったな

子を生まぬ肌なめらかでいて哀れ

まだ望みつないでおきたく確めず

堺市 吉 本 善 風

急いでる時はカレーを注文し

男一人四季の着物を壁に掛け

西宮市 山 本 一 傘

話したらわかるやくざで煽るとき

コロッケの好きなおひとのどこへ嫁く

悪銭も貰う理由があった金

大阪市 今 西 生 薑

異状なし軍隊口調の守衛なり

出発が羽田と聞いて一寸妬げ

三本の映画に合わず閉店時

同 舟 近 詠

大阪市 橋 本 緑 雨

万のつく金すられて驚きもせず

退屈に遊びを探すのに疲れ

血圧の心配冬も水枕

須坂市 高 峰 柳 児

親まさりどの子も故郷と遠く住み

こと酒に及んで転任にんまりし

和歌山市 秋 月 宏 方

場末とは白髪のおやし出前する

失礼な体重聞いてどうする気

商魂のある神さまのPR

村議とはつまり村でのうるさ聖

新居浜市 月 原 宵 明

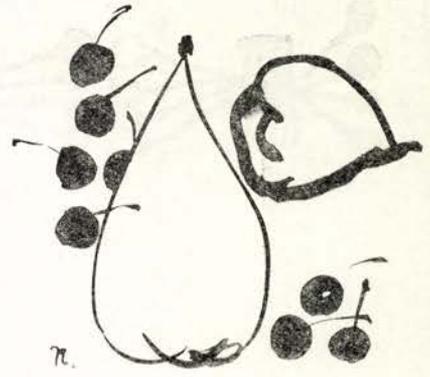
郭公へ一日里親来る時分

遠慮なくガールフレンド注文し

学問が無いので金をうんと貯め

大鵬が好きで宿題忘れ勝ち

妾宅と書かず猛犬に注意
十円で子を三十分ほど泣かし



家柄を買い人形を抱く如し

白星

有爲郎―句意平明にして表現また直截的で一読好作品と思うけれど、かもし出す陰影がうすいので、その点ものたりなさを感ずる。この物足りなさは作者が概念で創ろうとしているからではあるまいか。

博也―「人形を抱く如し」の対象が、夫個人(妻)であるなら、余りに前時代的な感情だ。それ故に句主の感じはより広い範囲で、この句を考えられたのではなからうかと、考えてみるのであるが「買い」と云う語句、「人形を抱く如し」と云う語句から推敲して見て、本来の考え方以外の物でないかと、この句観念的で一寸好作品のようには思わがそうでないといわれる有爲郎氏の評通りである。

旭童―前時代の感情をまだまだ持っている日本人ではあるが、二読三読する程に味

句評リレー

長野県 大坂府 愛媛県 大坂市

金井有為郎
新川博也
村上旭童
橘高薫風子

がなくするのは実感を伴わぬ為でしょうか。

薫風子―一見して古臭い句の部類に入る句だが、句そのものの想の古さと、古い事柄を批判する態度の句とは大変な相違がある。この句、世の変遷につれてそれぞれ形の上の異りはあろうが、何時の時代にも、「家柄を買い」「人形を抱く如き」事実は絶えぬことであるから、一概に明治の句いの句だとは云い切れぬものがあるとと思う。家柄を尊重する事は何時の時代にも変りがない、そう云った人間の弱点を衝いているので救われているのである。句の骨髄も立派だし佳句と思う。

有爲郎―古い事柄を現代の眼で見るとは尊いことである、そういう意味でこの句はあながち古いと捨て去る事は出来ぬが、文語体による客観的な手法は古い感じを与え、それに「如し」とか「ような」と云う

修辭は句を弱くしている事は否定出来ぬ。

博也―「買い」の対象を「抱き」の語句から人とされたが、各位は一般的な家柄と見ておられるようだ。とすると「人形を抱く如し」と云う批判、果して適切であろうか。人形を抱く、中味の空っぽなもの情のないものだという批判だけか受けとれない。一応批判句として頂けるが佳句だとは思われない。抱くと云う語から複雑な批判性を感じられておられるのだろうか。

旭童―批判句として一応まとまりをもった句ではあるが、何か読者に訴える力が弱いように思う。

薫風子―私はかねがね句評リレーは最初の評者の評がそれ以後の評者に多大の先入観を与えるのではないかと思っていたので、最終評者としての私は第一回目の評では、句だけに目を通し(私以前の諸氏の評は読まずに)直ちに私なりの感想を述べた

のであったが、本誌五月号で高鷲重純氏が句評について、「予め文通によるパトンス持ち廻りはトップを受け持つ評者の評が、次次の句評の先入観になってしまっていること。中にはその先入観を打ち消そうと故意に反対のための反対を敢えてしたり、或は呆気なく同調したりしているようで、何かしら物足りないものがある。それでは句主たる作家に忠実な批評とはいえないのではなからうか。」と述べておられた。誠に當を得たことだと思われるのでここに再録させて頂いた。

さて、この句についても一言私の云いたいことは「家柄」「買い」「人形」「抱く」「如し」の各語が沈んだ暗い情感を出す方向に足並を揃えていること、そして、いながら、にんぎょう、だく、ごとし、と四ツの濁音の効果である。私自身洗練された句だと思ふのだが、諸氏の評の通りあまりにも概念的事であることのそしりはまぬがれぬものようだ。

何の字を引いたか遺書の横の辞書

一三六

有爲郎―遠慮なく言うとも明治川柳の句が強くて新鮮味がない。作為がオーバーである。作者はいわゆる川柳的うがちのみに魅力を感じて、人間を描こうとする意欲を忘れていたのではないか、「遺書」と「辞書」との相似音の重なりも気になる。

博也―有爲郎氏の評につきると思いま

す。しかし、可能性の範囲において、これを句にすることを作為のオーバーというべきではないと思えます。「遺書」と「辞書」の重複は気になりますが、表現技巧の問題は別として、この句小説的で面白いと思えます。「可能性の追求」「偶然の重なり」そういう奇抜な句が川柳にあってもいいのではないかと考えています。

旭童―余りにも小道具を揃えすぎた感あり。有為郎氏に同感。

薰風子―辞書があれば字を引いたと決めてかかった作者の独断が句を面白くしている反面、句の内容を浅くしてしまつた。下八音字で状景を写し出し、上九音字で作者の主観を押し出している。句の構成はかように単純明確であり、句の味の深さに缺けることとなつたが、推理的な深みを与える役割を果たしている。功罪相半ばしているようだ。たんまり金を持った老人の遺書。否、否、「遺書の横の辞書」と疊みかけたイメエジはやはり自殺に限る。自殺者の几帳面な人物。その人間の心理の綾。年の頃は、もしや未遂に終りはしなかつたか。などなど、空想は無限で読者をひそかに愉しませてくれるのも、「何の字を引いたか」と云う作者の独断によるものである。一風変わった句だ。

有為郎―「遺書」というような切実な場面を大寫ししながら迫るものはないのは、この自殺者の感情が働いていないからであ

り、そこに「とほけた」味をかもし出して句をおもしろくしている。おもしろくしているというだけである。

博也―読者を愉ませてくれる句、それだけで充分。薰風子氏の評でいづくされて

いる。旭童―遺書の字を間違えまいとして辞書を見る古武士的風格、冷静さを持った自殺者がいるかどうか、多分に空想的。机上で作られた句。

薰風子―「切実な場面を写しながら、迫力がない。」「可能性の追求を川柳に試みて然るべきではなからうか。」「机上で作られた句」だとする諸氏の評に全く同感します。句主もこの句によって深刻さを出そうとねらわれた訳でもなからうが、特異な素材を発見したとの興味だけにとどまっているのは惜しい。

がんとして下座に女らしゅういる

若葉

有為郎―こうした卑屈な同性に対する作者の抵抗は一応うなずける。「がんとして」と「女らしゅう」に女性をよく描いている。こういう句から情態の盛上りを求めようとするのは無理ではあるが、余りに冷めた眼で客観視しているのだからおいが薄くなってしまった感じである。

博也―「がんとして」が余りにきつく隠じられるが、この場合この程度の誇張があつて「女らしゅういる」が適切にきいてい

る。たしかに、男だったら「がんとして」がひどく気になつたはずだから、同性にしてはじめて「がんとして」という表現が出来たと考えられる。冷たい客観ではなく、同性の抵抗ではあつても温かい客観だと私は受ける。「がんとして」は誇張であつて作者の本心ではない。

旭童―この場合の「がんとして」は誇張ではなくよくきいていと思う。当然もつと上へいってよし行くべきを、頑として下座を動かぬ同性へのひはん温みは感じられない。

薰風子―「らしゅう」が曲者でこういうのに限って腹黒い。座がはねると下座から見ている人のアラ、不平不満を一度に吐き出そうと云つた型なのである。中年夫人で一見なよなよと女らしゅう見えるが、仲々どうして、その粘っこさは一筋縄では行かない。そういった人物をうまく描いてある。この句、客観句と見られようが、一人称の句として、つまり自分自身を客観した句と見られることも出来、その方が或は内容より深く面白いかも知れない。上五、蛇足のようにでありながら、以下の平凡を救う手段として、案外生きた重みを持っている。

有為郎―作者が女だと承知してこの句を見た時生きてくる。男性が作ったものなら単なる皮肉にすぎなくなる。作者の性別によって我々の受取り方も差異を生じてくる

ことを知つた。薰風子氏の言うように「らしゅう」に複雑なものを含んでいる。

博也―「らしゅういる」という語が下五にあるので「がんとして」は全然受けつけないという状況ではなく、女らしい態度でねちねちことわっているのだと思う。それを「がんとして」と誇張した表現をもって来たことによつて下五の「らしゅういる」が生きている。「がんとして」はやはり誇張ととりた。作者は多分自分自身を客観的に表現されたものだと思うが、一般客観句として充分。作者はこの句の女性に自己の一部を感じてほほえんでいるのであつて、冷たい眼でこれを批判しているものではない。

旭童―この句無記名で出された場合の事を考えさせられました。

薰風子―今回の句評のメンバーが絵で男

色紙短冊

書画用品

大坂戎がし

丹青堂

を申せし、せし

性であったので残念に思います。女と云うものはかくやあらんと思しながら、第一回の評を試みたのですが、この句、男性が受け取る内容以上に、女性の鑑賞者は身近に苦笑を覚えるのではないでしょうか。句の傾向が批判句なので深い味わいと云ったものに乏しいが、(批判の句は皆深い味がないと云うことではない)句主は女性作家としては、客観する眼を多分に持つていられると思える。

力全部抜いて浴場一人なり

きえ

有為郎—いわゆる川柳らしい軽い味を盛った句として成功してはいる。成功と言ってもそれは川柳らしいおもしろい味を出すことに成功しているのであって、現代の川柳が指向する詩情には遠い。

博也—ありふれた情景をよくもかくうまくまとめあげたと絶賛を送りたい。この浴場は当然大衆浴場であるべきだし、人物は働く人であってほしい。「一人なり」のなり止め、この場合よくきいて。「力全部抜いて」の表現、新しい。いつも感じたり、見たりする情景だが、表現の適切さから、意外の爽気、浴場の湯気の色、少し熱い目の湯加減まで感じられるように思う。私としては、そうした中に庶民の詩情が感じられると思えさせる。

旭童—働くもののよろこびをうたいあげて妙。この場合「力全部抜いて」の全部、

何とかならぬものか。

薰風子—身体力をぬいて仕舞い湯に浸る、など云う句はざらにある。唯、僅かに、大きな浴槽で一人思いつき切り全身の力を抜いたと表現したところを取るべき理由があるかと思われるのだが。「力全部抜いて」の表現も気になるが、作句以前の非凡な眼を期待したい。余りにも類想的で新鮮さは感じられない。

有為郎—作者は「力全部抜いて」などという句語に「してやったり」と悦に入っているのかも知れないが、そうした句語のおもしろさだけに比重がかかっていて、句の内容はとりたてる程のものはない。旭童氏の言うような「働く者のよろこび」など句の中から汲みとれぬ。

博也—確かに類想的で新鮮さはない。新鮮さを求める句、それはそれとして作句すればいいものではないだらうか。我々の生活の大半以上は類型的なものだから、その中に新しい発見、所謂新鮮さを見つめることは大切なことだが、むつかしいことだ。しかしこの句のように、ざらにある状況を新しい表現によって生かすことも川柳の新しいとは別に楽しいものだ。「全部」を各氏は気にしておられるようだが、小生はこの濁音が句を強くしていると感じている。「一人」であるからこそ自分の意志で「力を全部抜いた」のであって、大手を振って浴槽のへりに頭をのせてのびのびと眼

をとしている作者が浮ぶ。自分の意志で「力を抜いた」様子はきれいな語句でなく「全部」と濁った強さである。

旭童—どこにでもころがっている句材を拾いあげて(その為に類想的で新鮮さに乏しいかも知れないが)一句にまとめあげた生活詩としていただきたい。

薰風子—平凡なことを平凡に詠んだのは川柳にのちがいない。平凡なことを非凡に詠むことは極めてむずかしいことだ。それで、われわれは新鮮な、特異な題材へ眼を向ける努力を絶えずしなければならぬのである。この句、平凡を非凡に詠み得たと私は思えない。

けちんぼが余命を知ったあわてよう

す、む

博也—けちんぼとはかくやあらんとはほえましくなる。題詠ですらすら出来た句だ。このけちんぼ、割合早く余命を知つたらしい。五十五六位だと想像する。「あわてよう」という語句で、そうしたことを考えられる。きっとこのけちんぼは彼らしい楽しみを見つかることだらう。軽いおかしみの句として、むつかしいことは言う必要もない。

旭童—幸福なるけちんぼ、一読してはほえましくなる、句主と共にこのけちんぼ氏に拍手を送りたい。

薰風子—すらすらとわだかまりなく表現されている。穿ちの味あり、可笑みの要素

は充分、軽味の匂いもする。三要素をそれぞれ兼ね併せた句は、「子沢山使いにやつたのを忘れ」「降りる客いとんのんと続くなり」など、佳句が多いが、この句物足りぬものが多分にある。人生の悲喜劇の表現の底も浅いと思われる。「文句なしに万人の共感(感動ではない)を呼ぶ句」そのことがこの句の取柄でもあり、缺陷でもあろう。

有為郎—けちんぼのあわてよう作者が痛快がっているであろう。作者は「三要素」あるを知って露郎師のいわゆる「句に情緒」を忘れている。

博也—薰風子氏はうまいことを云われる。確かに万人の共感を呼ぶ句で、それが取柄でもあり、缺陷でもあらう。

旭童—万人の共感を呼ぶ句、しかしふかみがない。

薰風子—博也氏が「題詠ですらすらと出来た句だ。」と云われているがその通り、本社句会席題「けちんぼ」の天位の句である。余命を知ったあわてようという表現は、題に対して、正にこれ以上のものはなさそうな適確さである。それでいて商物足りなさを感ずる。披露を聞いていて、はたと膝をうたしめる句も、後刻、熟読興味すれば案外つまらぬ句であったりするの、句会吟の通有性である。(担当・真鍋一飄)

★

課題吟も句評に登場

句評リレーは、川柳塔や近作柳樽の雑詠からであったが、今回は題詠も参加した。一踏集や句会吟にも魂を込めよう。

海水浴と耳疾患



尾崎方正

海に出て心のうさを捨て
柳慶
よか

海の人を呑みたい海の
恒雄
青

貸ボート打明ける気で沖
季賛
へこぎ

耳垢をためてアブストラ
一瓢
クトの詩

男手に育って耳に垢をた
清子
め

耳が聴えない程不自由なものはない。古今東西卑の人で偉らないはヘレンケラー一人を除いて見当らない。聾であり啞であった彼女は今世に於て多くの仕事を残した勿論介添に當を得た女性が居たらではあるが、又ツエーエトツエエが聾であったと云われるが五十七歳過ぎてからの事であり若い時代に耳に残した音感で結構秀れた作曲が出来たのである。

耳は大切にすべきである、彼女や彼女の蜜の如き甘い陸言が聴えなくて此世に生を享けた甲斐がなからう。一、中耳炎、よく海水が耳に這入ってから中耳炎を起し

た云う人がある。之は全く素人の言草で専門家が聴けば可笑しい事だ。健全な鼓膜があつて中耳腔へ何で水が浸入出来るかだ。但し以前に中耳炎を病み鼓膜の穿孔が塞がずにあれば中耳炎の再発を免れない。鼓膜の正常な人に屢々中耳炎を起すのは海水が鼻腔に入り強く鼻かむことにより鼻腔の後方にある耳管(昔は歐氏管即ちオイヒスターヒー氏管と呼んだ)を通して鼻腔内の細菌を中耳腔へ追込む為である。だから水中では強く鼻をかまないことである。既往に於て中耳炎を病み鼓膜に破れた孔を痕している人は海水浴を避けて山登りとかハイキングとか他の運動を行うように心掛けて欲しい。生糸(脱脂してない絹)とか油をつけたとか云うが海水浴に入浴でなければ綿が湿るものと遂に除去してしまふ。そして鼓腔の穿孔から水が這入ると中耳炎の再発を起すことは先述述べた所である。之は最近抗生物質やサルファ剤で約十日の治療で癒すが毎年再発を繰返しているのを知る人は少い。そして遂には可成の難聴者となるのである。

世には鼓膜に穿孔が痕つたのに中耳炎は治つたから海水浴はかまわぬと云う医者が有る。上述の事実から考へるとそつとする語である。だから子供を持っている親達もしその子に中耳炎を病つた既往症があれば少々金銭はかかっても他の運動に転向せしむべきである。二、外耳道炎並に耳せつ(できもの)クロールで泳がなくても水中でばちばちやるのでどうせ海水が外耳道に這入る事を覚悟の前で海水浴をせなくてはならない。正常な鼓膜の持ち主ではなんば海水が耳に這入つても後の処置が適切であれば何等の害もない。即ち水から出て砂浜に立ち水の這入つた方の耳がたを下方に引張り同側の片脚でチンチンをする

と本當に水が這入つておれば冷水であるに拘らず温い湯の如な水がドロツと出るものである。チンチンを救回行つて斯様な感じのない時は本當に水が這入つて居らないのである此の後が大事である。耳から水が出ないでも耳の中がこすばいと何かあるよう感じて遂に小指を外耳道の入口へ突込んで弄り廻す。之が悪いので早いのは其夜から遅くも翌日か翌々日かには耳痛が始まる。之は耳せつが出来た為で出来所によれば食物を噛んでも歩いても耳に響いて大変痛くもある。二、三日夜も眠れぬことが有る。炎症が波及すれば切開を必要とする場合もあるが(できもの)である。之に對する注意は海水浴場では絶対に外耳道に触れないことである。それではどうすれば良いかと云うに手の掌で耳を救回圧するか軽くたたいて置く程度で異物感や痒みが忘れるものである。そして其の次は太陽下で外耳道を充分乾かすことが大切で、徹の他は大抵の菌が乾くと直ぐ死ぬからである。乾いてから再び水に這入つても何等差支えがない。そして家に帰り入浴してから手が清潔になつた処でそつと耳掻きで耳を掃除するよう心掛けたい。処が正常な鼓膜の持主でも外耳炎に耳垢があると其の耳垢が水に逢つて湿気を持つと大変よい細菌の培養基となり細菌がどどん増殖培養されて皮膚を犯し爛れを外耳道炎を起したり又前記耳せつを作ることを忘れてはならない。だから海水浴の前にはよく耳掃除をすることも心得るべきである。子を持つ親達は自己は勿論上記心得べき事柄を行い或は子に教え、海水浴の季節には前以つて注意を怠らぬようお願いしたい。三、耳管閉塞、海水が鼻腔へ入ると鼻粘膜に炎症を起して鼻カタルとなる。之は多くの場合治療を受けず放置しておいて自然に治るものであるが鼻粘膜が充血腫脹すると鼻腔後方にある耳管(前記)の粘膜も腫れる。この耳管は細く狭いので僅かに粘膜が腫れれば耳管狭窄を来し難聴、耳鳴を訴へる。多くの場合耳が塞つたような感じ井戸の底でものを云つて居るような感じ、自分の声が耳に響く、鼓膜に紙を一枚貼つたような感じ等である。之の粘膜の腫れも引いて自然に治るものである。併し耳管に障害あるものは粘膜の腫脹は消退しても中々治らないことがある場合通気法により耳管を拡げると治るが矢張り専門医の治療を俟たなくてはならない。四、顔外として之は耳に余り関係はないが海水浴から帰つて其夜昼の疲れで裸か寝て翌日より発熱咽が痛くて食物が摂れないより発熱であることが有る。即ち扁桃腺炎になる。就寝前には口腔を清潔にし寝衣一枚でもよいから着せる事で夜中子供の寝相を見ただけの親心があつて欲しい。達者な時に裸か寝て何ともなくても海水浴殊に水泳後はエネルギーの消耗著しく体力の低下と従つて抵抗力の劣えている事を考えたと決して裸で寝かすべきでない。

最後に、一言述べたい事は、眼や鼻や扁桃腺の事はやかましく云うが耳は痛まない限り耳漏れ位で放つて置く人が多い。一生ほんくらで過ごす人ならば何にも云わなうであらう。併し多少とも頭角を顯わすようになれば恐らく放置した親を大いに恨むこととなる事は必然で、時々斯様な愚者に接する私は親の理解を望むや切なるものがある。

附記、海水浴は清潔な海を選ぶこと。仮令有名であつても現在不潔な海は絶対避けること。又綺麗な海で泳い後は必ず設備されたシャワーで体の隅々まで洗い流すこと。又学校のプールで水泳後耳の病気が多いことから、プールは不潔と考へるべきで、経費の点から早い所で一週間にプールの水を替えている現状では理論的にも不潔である。従つてプールで水泳後は必ずシャワーで丁寧に水洗せしむる様指導されたい。家庭でもよく教え込むこと。(大阪近信病院耳鼻咽喉科部長)

虚子俳話を

めぐつて

— 川柳の中の俳論



早川清生

俳句界の巨匠高浜虚子翁が逝つたのは昨年四月八日である。八十五年の長い生涯を通じて常に俳壇最高峰の位置を維持し続けたのはまことに偉大なことで、その傘下に馳せ参じた人たちはもとより、主義主張を異にする人たちもすべて虚子を目標としたことなど、業績とともにその名は永遠に文芸史に輝くであろう。このため俳壇の外にある一部の事を好む人たちは虚子没後の混乱を予測したが、ホトトギス系の人には俳人らしい矜りと師恩があり、それ以外の人はずでに旗幟明らかである。言挙げするあせりもなかった。

俳句を近代文学の座に近づけた正岡子規の遺産のうち、伝統的季題趣味を継承した虚子は数多くの俳話を残した。川柳界においても作句技術は年々洗練の度を加えているが、理論の面はいま飛躍期にあるため、文芸の他のジャンルからその摂取に忙がしい。素朴なあるいは高踏的な文学論、浪漫・象徴派からプロレタリア派・モダニズムを経て戦後に至る各期の詩論、その他短歌の影響、甚だしいのは演劇や絵画の世界での意見などをわれわれは柳誌のいたるところに見出すであろう。ことに源とともにする俳句は、その形式や表現法が類似するため柳論の中には俳句から示唆を受けたものが少なくない。川柳の常識として日頃口にしていることが俳論を敷衍したものであることも多い。それらは文芸の興るときにしばしば見られる現象でむしろよろこばしいことである、それらを血とし肉として川柳の理念が確立される日も遠くないと信じている。一周忌を機として、虚子の俳話がどのように川柳に消化されているか、虚子の言葉

を綴ってその一二につき考えてみるのも意義のあることだと思ふ。写実主義に沿って展開した明治以後の文芸の中に、子規は写生を主唱して俳句革新をなし得たが、それを虚子は主観的に、河東碧梧桐は客観的に推し進めたと言われている。もちろん写実主義は芭蕉に蕪村にまた一茶にすでに現われているが、子規は西欧の理論に基礎を求め、伝統の中に技法を学んでそれを発展させた。

虚子は最初子規の影響を受けて客観写生の句を発表していた。客観写生とは江戸末期以降の小主観に遊ぶ低俗な月並調を打破し、俳句の文学性を高めるため写生に客観の語を冠して説いた写生論である。虚子は「写生」ということは自然の中に飛込んでその相を把握しこれを現わすことである。明鏡止水の心になって自然の相に接しようとするのである。「写生のわざを磨くことによつて、自然は心を許してこちらに近よってくるし、こちらの心眼は自然に対して明らかになつて行くのである。」と考へ、「一般文芸の議論としては主客両観の写生論も面白いのである。しかし俳句にあつてはどこまでも客観写生によつて歩を進めてゆくことがよろしい。」と説いた。「(一)」の中は虚子の言葉)

これは初心者には見たままを写せと教え、中級の者には自然を客観的にうつしとるわざをみがけと説き、さらに高い境地に達した者には「客観写生を進めることによつて主観もまた到達するところが測り知れない。客観写生を試みてまた深き主観に到達せんと欲するものである。」と用いた。

大空に羽子の白妙とゞま
り
踊子や皆三日月の額髪
秋風や相顧みて人小さし
川を見るバナ、の皮は手
より落ち
見あたるまま虚子の客観写生の句を抜いてみた。

しかし虚子は俳句を季題趣味に限定したため、外への発展を促された写生主義は次第に内部に沈潜して主観主義を濃くするか、または頂末な現象細叙におちいる。このように遂に虚子の

手をこぼれて土に達するまでの種

のような細叙主義に墮するに至つてホトトギス内部からも批判が起つた。事実というものは作者の主観でそう認めたもので、主観を離れて事実はない、写生というものは自然の大部分を抹殺して一部を生かすものだといふ反省のため「写生のための写生」から「背後に主観の湿いのある客観句」に進まなければならなくなつた。

ここに虚子は客観写生を重視する反面、浪漫的な主観色を加えて行つた。「見たままをありのままに」という子規の素朴な写生論から「深く風光にうたれて純客観の描写に安んずること能わず。主観を客観の内に収めてしかも美を両観中に求めんとす。」と考へ、文芸である以上何等かの形で主観が現れるものだから、たとえ客観描写という技法の上に立つても十分な主観の裏付を求め、読者もそこに働く主観をおのずから汲み取れるとし、さらには技法として主観そのまますることもあり得るという境地に進んだ。

「私は元来主観尊重論者である。ただその主観は客観の形態を具備したものでなければ価値がない。文品の相違は多くその主観によつてきまる。客観描写を習熟しているうちに主観の鋭鋒は必ず尖

端を現わす。主観傾向の強い人でも客観の描写に忠実な人ならば決して主観暴露の浅薄な句を作らず、玉成した客観の主観句、即ち客観の衣を着た主観句を作るようになる。この域に達すれば主観即客観、客観即主観であつて堂に入ったものである。」(昭九)

おもかげのかりに野菊と名づけんか
霜降れば霜を楯とす法の城
年を以て巨人としたり歩み去る

爛々と昼の星見え菌生え
いずれも主観傾向の強い虚子の作品である。主観即客観、客観即主観という自在さは実践においてのみ理解できるとされる境地で、言い換えればそれは理論を超越するということと同意義であり、それが虚子俳句である。

しかし文芸の世界に哲学における意味での純客観などあり得る筈はない。虚子のいう主観とは抒情的表現というほどの意味で観念の問題ではない。一時期を小説家として自由に人情の世界を描いた虚子は、小説的要素が俳句に入るのを、俳句の古典性を季題と客観描写に集約して拒否することにより、俳句の特殊性を保とうとした。このため俳句は厳密な意味での近代文学の洗礼を遂に受けることがなかったと言われる。

結局虚子における客観写生とは、自然と自然に付随する人事を傍観的に眺め楽しむ客観趣味で、写生が写実主義の基礎的技法であるにもかかわらず、近代リアリズムの本質を発揮できず、単に作句の技術にとどまった。作者は対象から常にある距離を保って傷つくことがなく、決して現実と直接対決しようとはしなかった。川柳がはげしく対象に迫り、社会の本質を衝こうとするものである以上、客観写生のこういった一面はよく理解されねばならない。

また前述のように虚子は子規の「見たものをありのままにの」ありのままに」というところに疑問を持って、主観的あるいは抒情的な作句を主張したが、「見たものを」というところに疑問を持たなかったことは、子規の写生論から教歩を出たに過ぎず、見たものから発想し、鑑賞する場合も句の内容が具体的に脳裡に再現されねばならないとする発想法及び鑑賞法も子規の意見を継承したものである。

花鳥諷詠という言葉は客観写生論の発軀と時を同じゅうして昭和二年大阪毎日新聞の講演会で初めて発表された。これは虚子俳句の本質を示す言葉で虚子自身言ひ得たりとした。それ以前は俳句の客観性を明らかにするため叙景的抒

情詩という意味で、叙景詩(明二九)という語を用いていたが、叙景詩とか客観詩とかいうのでは表わし切れない認識を花鳥諷詠で表わそうとした。

「抒情詩であるが感情のみを詠うのではなく、四季の移り変りによって起る自然界の現象ならびにそれに伴う人事界の現象を描写して、そのかげに顔えている作者の感情を人に伝える。人生観には重きを置かないが、かかる感情にはすこぶる重きを置く。俳句を抒情詩なりと考えることは、とかく自然現象を練かにして自己の感情のみに依頼し、小主観のみを詠えば足るという傾向になりやすい。これに反して叙景詩である、もしくは花鳥諷詠であると考えることは、自己の小主観にたよらず自然現象の研究を命とする傾きが多くなってくる。」「正しい意味の花鳥諷詠とは作者の感情を中に深く蔵して季題を諷詠することである。」

しかしここで注意を要するのは花鳥諷詠の性格が「ただ世の中を加量と見、在るがままに在ると観じて自然とともに居る心持が強い。」とし、「この世を極楽と見、地獄と見るのもその人の心柄である。俳句は極楽の文学の一つである。人事を描くといつても決して切端つまつた、あがきのとれない、息苦しいというようなもの

描くことはしない。悲しいことを叙していてもどこか楽しい。」(昭二二)「浮世の荒波が迫ってきても、それは酷寒が押し寄せて来、厳寒が押し寄せて来たのと一般と観ずるようになる。」とする諦観的な現実逃避の人生観と、俳句を人生の救いとみる大衆好みの文学観にある。

柳界の中にも川柳を花鳥諷詠に対応して人間諷詠と規定する人たちがあつたが、川柳が批判詩を標榜する以上、花鳥諷詠の本質を知らずして語呂合わせ式に、安易に人間諷詠と称することはある危険を伴うであろう。

次に、作品の難解さが問題となつていゝのは、短詩型の世界共通である。虚子によれば客観描写は平明にかつ單純化して、その表現のうしろに主観がたたえられてい

るのは、その單純な平明な描写の中から出てくる。読者はそれから深い感銘を得る。」(昭二七)

十七音字という短い形式を最大限に活かすには單純化がよくきいていなければならぬ。その單純化は平明な叙法の中に余情が含蓄され、読者の心に自然にしみわたることが大切だといふのである。「平明なる世界は好きだ。晦淡なる世界はきらいだ。平明なる社会は好きだ。晦淡なる社会はきらいだ」に始まり、家庭、人、言葉、文学を経て「平明なる俳句は好きだ。晦淡なる俳句はきらいだ」(昭三四)に終る言葉は虚子の心持を端的に示している。

難解といつても種々あつて街学的なものや、ことさら意味ありげな姿を装うもの、用語が適切でないものなどは論外であるが、もと

迅速で・経済的

東京・静岡・名古屋
へ御進物品

マツザカヤの

直配承り

お中元に……
暑中お見舞に

一三八種のお進品を取揃えております



大阪日本橋
松坂屋
電話 (64)1531

(名古屋以东の中元は7月15日まで)



赤染衛門と

周防内侍

富士野鞍馬

赤染と周防内侍とことし
(タル二二)

という川柳があるが、赤染衛門と周防内侍とはいとこではない。時代も八十年ほどちがう。これは

赤染も周防も百の緋の袴

(タル二二五)

のように、周防を素袍に、赤染を緋の袴にもじった戯作である。

やすらはで寝なましものを

さよふけて

かたぶくまでの

月を見しかな

は、百人一首中の赤染衛門の

呼ばれていた。

はじめ、藤原道長の妻倫子

に仕え、またそのむすめの上

東門院彰子にも仕えたようである。

そして大江為基と親しく

なつたが、その恋は次第に

うすれて、為基の従兄で学者

の、大江匡衡と結婚した。良

妻賢母型で、和泉式部のように

奔放型ではなかった。曾孫

が、有名な大江匡房で、匡房

誕生の長久二年(一〇四一)

には、その産衣を縫った歌が

あるから、それまで健在であ

ったことになる。その時は八

十余才であつただらうと思わ

れる。

赤染を詠んだ川柳は、歌に

対するものでなく、京紅と江

戸紫とに利かせ、紫式部を並

べ、

京染と江戸染百で月をよみ

京都では衛門江戸では式部也

もと文芸の発展は常にその基盤である社会の発展にうながされるものであつて、ことに花鳥諷詠と異り社会を活写しようとする川柳には、社会の発展に伴い内容が複雑化する事も止むを得ないのではなからうか。いくら社会が変わつてもその底にある真なるものは不変だとか、無理な構成や省略から意

思の伝達を欠くとか言われているが、韻律の快きから脱却して内面的な川柳の可能性を追求し、曲折の多い思念を盛りこんで文学的な進歩を求めたため、ないしは新しい次元の表現方法を開拓しようとして

の難解もある。中には日々現れる新語や専門語が理解されずに難解呼ばわりされる場合もある。

次に、虚子は選句について強い自信を持ち、汀女句集の序文に手紙の形式で「今日の汀女を

作り上げたのは、あなたの作句の力と私の選の力が相俟つたもの」と述べている。虚子は「選は創作

なり」と考へて、作者の意図とは別に選者が句の面白さや価値を認

めることがあつてよいと信じ、作者の中から最もよいものを引き出すとした。

また「雑詠は塾」と言い、明治四十一年に課題句に代つてホトトギスに雑詠欄を設けた。雑詠という言葉はこれが最初である。雑詠は塾とも道場とも呼び、展覧会場でなく修練の場であるとしたが、徒らな敵選はしなかつた。個人選

というものは短詩型の宿命であつて諸種の問題を包蔵しており、この形式に疑問を持つ人も多い。虚子の選句方法は多くの作家を育てる母胎となつたが、一面商業主義

のそしりを招き、自らの子女を前面に押し出すようにする努力とともに俳句を冒瀆するものとの批判も受けた

さらに「古壺新酒」と称し、十七音字季題趣味という極端な制約の中に新しいものを盛りろうとした。しかし碧梧桐の新傾向

俳句に対しては「深は新なり」として、伝統文学における新しさは横に広く境界を探しまわることではなく、専心深く研究して古人の築き上げたものに一握の砂を加え

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る



清 酒

灘・魚崎

大塚合名会社醸

(タル二三)

江戸染も京染も入る百人一首

(〃二八)

紫女亦女虚々々々の物語

(〃二二〇)

などと詠まれている。どちら

も百人一首では月をよみ、ま

た紫女には「源氏物語」赤染

には「栄華物語」の著がある。

総揚げに赤染衛門並ばせる

(タル三六)

老人に赤染衛門あげられる

(〃一八)

は、吉原遊里の新造をいった

もので、それが赤衣着物を着

ていたの、衛門に洒落て作

られた句である。また、

りん病のくすり赤染衛門なり

百人に痲病の薬一人あり

(タル四五)

と、月経中の交接は、りん病

が治るといふ、滑稽な俗説が

あったので、こんな句もあ

る。

周防内侍は、名は仲子。桓

武平氏の後裔、高棟王六世の

孫、平棟仲の女で、父が周防

因幡の国守であったので、

「周防」と呼ばれていた。後冷

泉、後三条、白河、堀河と四

朝に仕えた内侍で、赤染衛門

の曾孫大江匡房とも交友があ

ったようである。没年は、天

永二年(一一一一)六十五才

と推定されている。

百人一首に入れられている

歌は、

春の夜の歩ばかりなる

手枕に

かひなく立たん

名こそ惜しけれ

で、「千載集」雑部に、「き

さらぎばかり、月のあかき夜

二条の院にて、人々あまた居

あかして、物語などし侍りけ

るに、内侍周防より、臥して

「枕をかな」と忍びやかに言

ふを聞きて大納言忠家「これ

を枕に」とて、腕を御簾の下

より差入れて侍りければ詠み

ける。」と詞書して収録されて

ある。この時忠家は、

契りありて春の夜深き

手枕を

いかが甲斐なき

夢になすべき

と、即座に返している。忠家

とは別に恋仲ではなかったが

そのころの宮中サロンの、洗

練されたいたずら、じようだ

んであった。と見られる。

およしよと云はず小声で春の夜

の

と川柳はうがっている。また

くじられたあとも知れず春

の夜の

と末番にも詠んでいる。

夢ばかりなるかまくらに二三

年

これは歌の文句取りで、鎌

倉東慶寺を詠んだ句である。

東慶寺へかけ込んで三年修業

すると、妻からの離縁ができ

たのである。

ることだと考え、伝統の枠の中

の新しさをさぐることを目標とし

た。

そのため「理論は実行のあと」

と教えて理論を先立てて作句する

弱さを説き、作家は何も忘れて創

作し、出てきた創作の中から理論

を見出すのがよいとした。平畑静

塔氏のように新興俳句でも理論よ

り実作が先だとする人もいる。

従って「吾が侪に非ざる俳句界

には多少の議論が横行しているそ

うですが、それらは自ら発生し、

自ら消滅するあたかも病菌の如き

ものかと思ひます。黙ってほって

置けばそれ自身盛んに談論してや

がて自滅して行くこと、古今規を

一にしています。」(昭和一〇日

野草城をホトトギス同人より削

除)と伝統を守ろうとするときは

峻厳を極めた。

こんなことも言っている。「俳

句の一文芸の目的は求道でなく

て美である。」「真を追求しても美

は従いて来るのではない。これを

美とするには手腕を要する。それ

を有し、ことに花鳥諷詠などはこ

の語の中に俳句論のすべてを入れ

て説いたので計り知れない重みを

持つに至ったが、その俳詠のいす

れもがひとつの方向に集約されて

いる。子規の俳句革新運動を復古

であると思ひなし、近代詩の本質た

る批判精神を放棄したところに虚

子の立場があることを知る必要が

あろう。復古と言っても例えは芭

蕉の風雅は、封建的な中世的現実

の中に真実を追求しようとした場

合の止むを得ない伝統復帰であ

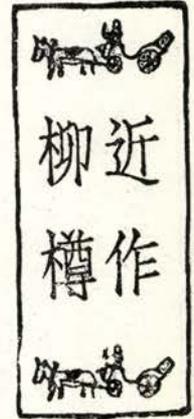
り、花鳥諷詠とは趣を異にするの

である。



ココロ
便箋





麻生路郎 選
北川春巢 選

晴着きて牛のお尻をよう抜けず 岸和田市 内藤ささ子

仲人を引きうけたまま病み続け 同

ぶどう酒を飲んで小さなやけに 同

新居拜見 四句

水道もひねって新居褒めておき 同

天井に鶴新築へ初夏の風 同

新築へ豆腐屋はもう声を掛け 同

新築へおもちゃのように灯が点り 同

下戸かぜをひいてかえった花の雨 竹原市 杉原 愛鳩

花嫁の荷で一ぱいの家が借れ 同

無心云う臭が少々酒くさい 同

内心は雨がうれしい骨休み 同

プログラム代理代理と書いてなし 同

ふんふんと聞けば女のでかい夢 岸和田市 田端くにを

初婚もう無理と仲人にもいわれ 同

破れ畳気にして庭で水臭し 同

熊谷のようにポト屋呼びつつけ 同

赤線は消えず屋台で囁かれ 同

逢えぬ夜の帯は淋しい音で解け 西宮市 末沢 花美

愛情へ自由を返上して悔いず 同

黒い血が出そう不倫の指切れば 同

まばたきへ涙をかくす早さなり 同

妹の結婚

はしやげば虚勢のように見られ、 同

お通夜の席でも女着る話 美祿市 安平次弘道

無事息災神棚にある埃 同

器用さがすぐに仕事を変えたがり 同

大学まで行ける幼稚園で親必死 同

無精髭が好きと女心はややこしい 同

二階から目薬という金を借り 熊本市 田口 麦彦

上り坂もなくゴシップもない女優 同

新聞にのってましたと妻強気 同

メーデーの余韻にひたる中ジョッキ 同

世はすすむ母がダッ缶を口にして 同

網棚にヒヨコ鳴くのも春なれや 大阪府 高橋 尚史

浮名立つ毎に芸域広うなり 同



雑筆 春秋

句評に寄せて (1)

真原七面山

川柳の入選句を専門誌以外のもの、例えば、新聞とか月刊雑誌などに発表する場合は、特に優秀な句を選んで、これに選者の評をつけて発表するのが慣例になっています。

で、この評は、その句が内蔵しているところの句意を深く掘り下げて前面に押し出し、より分かり易く、より鑑賞し易いようにし、その句の優秀さを読者に照会するのが目的であります。一方、川柳普及の一役も買っていて、いわば一石二鳥をねらっている訳であります。

句が選者の句評を従えて登場しますと、通常その句は、一段とその輝きを増し、権威づけられ、またある場合などは、句に重量感や句品なども付加されて、句の良さと偉大さがその評によって裏づけされるのであります。ときに選者の知性の乏しさや、句への認識の欠如や、人生体験の浅薄さ貧困さから、その句の意味するものと



本心がおうすの泡に 出る 茶室	同	労働歌一人で唄えば 味気なし	同
タバコだけきらす <small>ハシ</small> と 続けて居	同	住込みのおかげで見れる テレビ <small>タリ</small>	同
春うららうらら楽しむ暇もなし <small>愛媛県</small>	大垣たもつ	女房に尻叩かれたペンキ塗り <small>大取市</small>	本村 文福
一線を越えればエクボにはみえず	同	喫茶店煙の中をねばり抜き	同
ドライヤーにのぼせ夜霧に冷 <small>タリ</small>	同	スピッツの泥道だけは抱いてゆき	同
家計簿へサクラサクラと云うと <small>タリ</small>	同	飲んだ酒勘定したら蔵が建ち	同
ガラス戸に写して術後シ <small>タリ</small> と立ち <small>日原市</small>	杉本 一鶴	ニコヨンの不満は立派な家が建ち <small>宇都市</small>	神田 豊年
ルージュひき直して激情影もなく	同	蛙鳴くことまで書いてくれる友	同
遊ぶのも楽じゃないなとよい身分	同	世渡りのこんなところに頭下げ	同
母の日も母に見舞われる不仕合せ	同	落ちそうな腹でネズミのよう動き	同
アンテナの間を泳ぐ鯉のほり <small>大取市</small>	宮原 敏子	迂闊にも同じ手口でまた借られ <small>和歌山県</small>	木下 一休
生理日を葉でのばす 五月晴	同	もう一度煽げば燃る 恋であり	同
還暦の腰バチンコでシャンと伸び	同	失恋をなだめてくれるバラが咲き	同
ダイナマイト <small>みた</small> に寝た子 <small>を</small> 置き	同	人を焼く匂いが磯の香に混り	同
心うきうき春のリズムで米をとぐ <small>愛媛県</small>	竹田 青園	間借りへもお寺の寄附の義理か <small>た</small> <small>小松市</small>	関戸宗太郎
麦うれて島縞馬を思わせる	同	あり余る母乳で泣かす 育児法	同
雨押して米たのに里の母が居ず	同	サロンパス貼って痛さが認められ	同
打ち明けてびったり合った靴の音	同	宗教の自由を邪教おびやかし	同
アンテナに小鳥もとまる団地なり <small>石川県</small>	高山 清勝	くれた子になるとは知らぬ鯉の <small>こ</small> <small>岡山県</small>	藤原 秋月
路郎先生と水曜日	同	長尻へ時計の話をしてみるか	同
ずる休みして水曜の師をしのび	同	落ちぶれて古城のような家に住む	同

はおよそかけ離れた似ても似つかぬ評が生れて来る場合もありま
す。

五月の中旬山陽新聞に課題吟
「家計簿」の入選句の一部が発表
されました。

無論例によってその第一席二席
三席には選者の評が付けてありま
した。

この発表を見たある読者から、
「第一席についている評が素人の
僕にはどうも理解しにくいので
すが、良く分るように説明してい
ただけませんか」と頼まれたので、
よし来たとはかり早速新聞をとり
出して、その句と評を読んで見た
のですが、句と評がピッタリして
いないようなので、これは困った
なと思ひ、「この句は少しややこ
しいようですから、よく研究をし
てから、納得の行かれるように説
明を上げてみましょう」と、即答
をさけ、ていよくその場をのがれ
たものの、後で句と評をいくたび
読み返してみても、どうしても
評どおりを理解することは出来ま
せんでした。

で、その句は、
「家計簿を見ぬかれそうなお茶
を出し」

となっていて、その評は、
「主人が家計簿に目を通して
いる時、奥様にはヘソクリを生み出
したツゲ方にちょっと気になる



サイレンが電力節約型で鳴り 兵庫県 河原みのる
人殺しの本能木を伐る痛快さ 同

丹波六本御

頼光の史跡にナシヨナル塔をたて 同

口に手を当てずに笑う年になり 鳥取県 鈴木村諷子

良心の奴隸ばかりもつまらなく 同

女房を飾るにサラリーまだ足らず 同

月給で足らぬ背広でバーにも 大阪市 藤富 淀月

郵便をきっちり入れて乗りおくれ 同

恩給を貰うた帰途を玩具店 同

食欲不振しじみ貝まで瘦せている 松江市 田中 妖人

職ありやなしや芝生に寝る男 同

青春の砕ける音よ手紙裂く 同

洗濯の事にもふれて恋進み 兵庫県 辰巳忠太郎

病状の悪い自慢も斗病記 同

母の日をバーのマダムに教えられ 同

男の子のポケット蛇の皮も出る 布地区 坂上山椒坊

電化してメーターの存在を知り 同

戦場で拾った命デモで捨て 同

素人に頼み結局高くつき 兵庫県 護川 梢月

脱柵が緑の雨に濡れて着き 同

マネービルお腹の子供が急ぎ立 西宮市 樋口 寿栄

両替をした新札で使われず 同

就職を頼めば美人かと云われ 同

一匹の蠅に血圧上りそう 堺市 沢田 美喜

考える葦になってフケが増え 同

春や春ライオン威厳なく眠り 同

横着な男で直に賭けたがり 岡山県 太田 義流

御近所がみんな恐妻家で平和 同

わてはもう カクシ だすと三味を寄せ 同

戦争が面白いとは戦後の子 宇部市 平田 実男

妹結婚一句

妹のために脇役買って出る 同

妻乗せたペタルが重い倦怠期 同

俳優とはあわれ棺桶にも入り 見島市 伊丹柳瓢子

夜なきそば開票場へ来て稼ぎ 同

伴せは新婚世帯花で埋め 同

御神体のぞいてガムを噛み続け 兵庫県 遠山 可住

この海の広さへ糸を垂れて春 同

旅に出る化粧朝飯抜きにする 同

それ以上酔わせぬ程の仲になり 青森県 木村 涼人

ころがあり、主人にお茶を出して
注意力をそらそうとする微妙な神
経の働きをとらえてあますところ
がない」となっていて、句主は入
選の言葉の中で、

『あの川柳は職場の上司にとて
も茶の好きな人がおり、その人が
給料とりでは上茶はのめないと常
にもらしている言葉を思い出して
詠んだものです』と語っていま
す。

そこでこの句から、家計簿を見
ぬく人と見ぬかれる人とが、果し
て一つ屋根の下で、起居を共にし
ている夫と妻であるかどうかと云
う問題なのですが、どうもこれを
夫と妻とに見るのには、なにかか
うどこかに大きな無理とひっかか
りと間違いがあるような気がして
なりません。

(この句を一読して二人の対人
関係が、夫と妻にとれないのは、
それは取らない方が悪いので、川
柳常識に欠けている証拠であるか
ら、そう云うものに川柳を論する
資格はないと言われればそれまで
のことなんです。)

私には二人の関係が、夫と妻に
受けとれないばかりか、見ぬく立
場の人はお客様で、見ぬかれる立
場の人は主人側としか取れませ
ん。

ではどうして、第一席に入賞し
たこのような立派な句から、こう



ドンファンをたきつけに来た春の風	同	いつか買うつもり自動車免許とり	同
公私共お世話になって左遷発ち	同	交通事故中に忘れぬ税吏の名	室井八九寸
社交家と云われ財布はいつも空	近藤 昭夫	着物だけ和式その他はみなアチラ	同
貧しさのせめて砂丘に行くブラン	同	春柄の値を挨拶の中で踏み	阿部たけし
指切りを忘れ父ちゃん手ぶらなり	久米奈良子	友達も浮気をすずめる程のヒス	同
くつきりと黒が似合うて未亡人	同	少年の闘志は白い息を吐き	内海 敬太
流行へ趣味の女房を持てあまし	高橋 蟠蛇	被害者と自認の男酔っている	同
二次会へ顔の利くのが抜けて去に	同	バット振るまね子供は湯槽でも	都倉 求女
職人が胃腸で死んで不便がり	檜原 万女	鉛筆が折れたところで立つトイレ	同
運動会勝てば祝賀の寄附が要り	同	僧の眉きびしく動く平和論	叶岡 史風
村一に嫁して不幸の第一歩	菊地 白葩	ど甲斐性もなくせ造花胸につけ	同
洗たく機あるのに嫁も洗たく機	同	映画ゆき止めて帰ればみんな留守	吉田 隆史
母の日に娘がませた事を云い	西本 保夫	宴席の箸ばかり折る蟹の足	同
マニキュアの爪に小使いねだら	同	香水も買いましたよ恋もひろいま	郷原まき子
警戒の身構えまぶし未亡人	並木東田様	ふるさとへ着くはず汽車の頼もし	同
後ろ姿話してみたい人らしい	同	連休で田圃の遅れがやっと出来	松高 秀峰
婦人記者眼鏡のくもるニュース	佐内 隆文	窓口も笑顔が並ぶ恩給日	同
設計図通り大安から着手	同	怒鳴ってもみたが貧乏たじろかず	見本 泉洋
溝板を鳴らして帰るハイヒール	小谷 仙山	電話ではこんな優しい妻であり	同
幸福を忘れ上を見てなげき	同	税務署へ行くので煙草格下げし	末田 晃康
電気器具月賦で泣いたがみな揃い	福井 童昭	七十になっても易をみてもらい	同

ヒゲそり後に…

- 美容衛生剤G11
- アラントイン
- 水溶性ラノリン

配合

男性 200円

アストリゼン

も異った二つの意見が生れて来るのでしよう。

ちようどよい機会なので、句の受けとり方について少し研究してみること致しませう。

まずこの句を出来るだけ拡大解釈してみますと、

A、評者の評のとおりに対人関係は夫と妻で、そこにヘソクリ問題が出て来る場合。

B、対人関係は客と主人で、出したお茶のおそまつさから、家計の貧しさを見ぬかれそうだとする場合。

C、対人関係はBと同じで、家人の見栄から分にすぎた上茶を出しているとする場合。

D、対人関係はBとCと同じで、出した茶と家計が釣り合っているとは解する場合。

また他に解釈のしようがある



三池スト

テストケースなまを三池を煽て上げ 大田市 高田 抱逸
 警官五千三食分の折の嵩 同
 貧乏へ神経痛がつきまとい 宇部市 鎮浪 翠月
 クイズ解く根気仕事に鞭打てず 同
 様方がときどき変り不倅せ 神戸市 恒成 鯉太
 流行はガラガラ声も金になり 同
 アルサロで妻には見せぬ甘い顔 大和五条市 尾来 絵見
 祝復刊はなばなくもガリ版誌 同
 病んでからの花の季節は短かすぎ 羽野市 板倉天悟空
 週刊誌にもグレシヤムを知る嘆き 同
 御帰還は逢うて来ました顔の色 大阪市 竹内花代子
 思うこと多し植木に水をやり 同
 鉢巻の白が眼に立つ坐りこみ 岡山県 杉本たつよ
 磨いても白くはならぬ日焼けの娘 同
 姉女房に見られたくない柄を着る 岡山県 横山 一声
 炭焼きも若葉の山を降りて来る 同
 荷飾りの原書も見せる嫁の部屋 西宮市 三上 美路
 五月雨に相合傘でもらい風呂 同
 片手落ちのようだが妻に肩打たす 滋賀県 土守 蜻蛉
 二度と目を通せぬ句誌を売り惜み 同

つれづれに安保斗争のラジオかけ 伊丹市 小川静観堂
 クロレラへ蛙飛び込む水の音 同
 バッカスに笑みかけられて回復期 西宮市 森本 猛彦
 十代の花嫁遠慮なく笑い 同
 あれ悪やドラママ坊や第六感 川西市 佐伯 九紫
 掃除機を掃除してまず日曜日 同
 葉ほど飲む晩酌の幸に酔う 竹原市 山内 静水
 四つに切るオヤツぶ子の目も確か 同
 心中をするに連休など選び 出雲市 山本 朱紅
 つめたいわなどとうれしどき云い 同
 先代は鬼とも云われ蔵があり 山口県 藤本 星二
 臍くりがやつと貯ってまたはらみ 同
 美容体操婚期を意識して 桑港市 児玉 不村
 御丁寧にも帰化せよと書式来る 同
 民主国になっても素性大事がり ホノルル市 蓮池 風草
 乗員名簿先ず同県から探し 同
 鮮やかに財布掏られて褒めている 大阪市 山田 蛙水
 満開の庭8ミリが妻を呼び 同
 縁側のお灸へ風も手伝って 出雲市 佐藤 泰之
 病気なら一通りした灸の数 同
 ランドセル並んで行くは一年か 大阪市 稲森けい女

コーヒの味
 モダン 川柳
 心齊橋大丸北の辻東へ
御門
 TEL 06684
 御集会には階上御利用下さい

さて句をストラッと読み下した感じでは、句の中のどこからも、虚栄とか、見栄とか、はったりとか、外見とか、釣り合い似合い分相応とか云った感じを抱かせるような、なんの匂いもきつかけも見出すことは出来ませんし、そのように解釈しようとする程、抵抗感が無闇に高まって来て、理解への無理押しは絶対に効きそうにもありませんので、この句にCとDの意は含んでおらないようです。

次はAについて考えてみましょう。句がAのとおりには理解されるためには、この句は必ず家計簿を見ぬかれそうでお茶を



嫁菜摘む処なきまでビルが建ち 逢えぬ予感の今日もしぐれる 一羽十円必死で生みだて雄んば つつじ満開リクレーシの腰下し 若奥さんなどとパーマはからか 反抗期と知っていながら腹が立ち 呼び捨てにして先輩と肩を組み 呼び捨てにされてうれしい妻に 百姓の父に済まないほど睡し アルバイト学生今日では蹴られ アパートへ住み替わるのに方除 飲むやつが飲まぬ頭をあごでよみ ピンボケのお蔭うちもシャンにも 読経の済むを痺れた足で待ち 腰弁の型取れぬまま通いつめ お二階は電化下では火吹竹 晩成を信じる父に相済まず 人生にくたぶれて来て母恋し 新婚のいびきこれから案じられ 新任の上役定時出勤し	同 宮政 周防 種谷 敏明 岡崎 祥月 岡崎 雪美 井上美恵子 野口卯之助 橋本 裕邦 渡辺伊津志 高木繁太郎 黒田一十 井阪東天紅 坂東とあき 松本 忠三 森本黒天子 斉藤たけお 越智 義夫 三井 酔夢 谷本鈍愚坊 塚脇 笑太	大学を出すまで頑張る背の丸み 面白かったの歌で園児が帰って来 髪型も流行にして療養し ガム捨てて口笛になる分れ道 経理課へまた堅パンが追加され 仲人のなかつた鯉のほりもまじり コンサート二人のためのように ブラカード何にも云わず戻つて来 横綱は待ったもなしに引退し 雌鶏のときで醒めるも民主主義 背中にも襟を見つけたニニモ 枝垂桜積る話へ吹雪する おしやべりに先を越されたい話 御自由にあそばしませとかどを 病院に来て同病の多い椅子 花に酔う人もあるのにスト春斗 父母へ土産物買ういい気持 姉さんの言葉が変る外出着 飼猫にかまれ刑務所に行き 叶わない願いださい銭止めておこ	出原 真奇 山内 房子 西浜 青路 上杉 青山 奥谷 弘朗 藤岡 萌芽 福山えく呆 井上 旭峯 武田軍治郎 川村 山友 菊池喜与史 若柳花乃子 藤田 雪峰 大久保 吉田 俊和 木村よしを 村田 淑滋 守屋衣里子 月田北海坊 井元 美沙
--	---	---	--

肝疾患・疲労・二日酔

★総合強肝剤

ウロコ印

リポコール (12種の成分を配合)

20錠・50錠・100錠

武田薬品

出し
 家計簿を見ぬかれそうなので、お茶
 を出し
 家計簿を見ぬかれそうなので、お茶
 を出し
 となつてゐるか、それともまた
 見ぬかれそうなのは、見ぬかれ
 そうでのがなに変形してなにな
 っているのだとするか、その四つ
 の中のどれか一つでなければなり
 ません。

そこで、なは果してでの変形し
 たものかと云いますと、私には
 『そうだ』とお答えする自信もあ
 りませんし(時にこの句の場合な
 ど)それを証明する理論的な根拠
 の持ち合せもございません。

従つて、でのなへの変化説はこ
 れ以上取り上げて論ずる必要はあ
 りますまい。



一句に賭ける

— 六月の本社句会から

戸田古方

『誇りある「くれない丸」にのつてころよい潮風に吹かれて無事別府に着き、今は熊本の旅館「ひぜん屋」にいます。しと

しと雨が降っているので明日の阿蘇見物がちょっと心配です』

五月の月はじめ、卒業旅行に九州へいった生徒からのたよりです。関西汽船の新造船「くれない丸」が朝早く大阪を出航して別府に着いたのが第一日の夜、阿蘇見物は第三日の予定で。これはその前夜かいたもので、『熊本の「ひぜん屋」とありますが、実は阿蘇の北麓、杖立温泉からなのです。第二日は別府からここまで大分県を斜につん抜けてのバス旅行、きけば杖立はもう熊本県、肥後色も豊かなので、熊本といつてもいいわけなんです、このハガキを見ていると、つい熊本市からかいているような錯覚をおこすのです。旅の気楽さから地図なんか

忘れてしまっていたのかもしれないが、それにしても少し考えが足りなかったように思えます。

理にかたむけば堅くなり、情に痺させば流されるというのは漱石以来きき古したことはありますが、詩作にも緊張がすぎるときこちなく、無念無想と称しながらうっかりするとだらけてしまりのないものになりかねないのです。

なる程インスピレーションの消え失せぬ間に一気に仕上げることは大切でしょうが、それはそれなりに平素の練習や念入りの準備があつて、その上にくそいえることでありまして、思いつくまま、気のむくままでは決して佳品は生れないのであります。

なる程川柳は僅か十七音字の短詩ですから、たいへん軽くあつかうこともでき、そこに魅力もあり、大衆の創作しうる詩ともなっているでしょうが、私はそれによいのかと時々思います。川柳の

句会で没になつても、まことにあつさりしたもので、そうでない方もいられるかもしれませんが、その句のために払った犠牲がきわめて小さい、ザラ紙の小さい、しかも会場でくばられた句箋に、エ

ンピツがきです。考える時間も席題の加きは一旬せいせい十数分、兼題にしても大したことはないわけです。

これを他の創作芸術と比べてもごらん下さい。同じ句をかくにしても、短冊や色紙となれば、さらに半切その他の書幅になれば、そうしてカンバスに絵具をぬりこめる五十号、百号の油絵になれば、見上げるブロンズの彫刻になれば百年も千年ものこる建築になればそれがそれぞれ没にもなり選にも入ることを思えばたいへんちが

いとわなければなりません。こんなことを考えていると、一生をかけて一つの研究に打ちこむ

とはかぎらないその研究に、その作品へ全てを捧げてぶつかつてゆく。川柳家たるもの、猛省せざるを得ません。路郎先生は決して車中作句はされないそうです。そんなことをしたら終着駅までいってしまつとおっしゃいます。

東洋史に出てくる宋の王安石は救国の熱意から所謂新法なるものを編み出して、大いに富国強兵熱をあふりましたが、機を得なかつたのでかえつて国人の排斥に逢い不遇な生涯を終りました。

近くは東条英機にしても、自分の醜い野望ばかりであの失敗の競争につつこんだわけでもありません。しかし彼の一生をかけての作品は御存知の通り完全に没になつてしまいました。

人生を賭けるなぞというバクチのようにもひびきますが、寸毫もゆるがせにしない、一刀三礼の心の中からこそ、真の栄冠をかちえるのではないのでしょうか。「いのちある句」はここにこそはじめて生れるのではないのでしょうか。

夜の蜘蛛死んだまねした
ままで死に

(川柳塔三九七) 須崎豆秋
川柳塔第一頁で豆秋さん一流の作風にふれて、その考えはいっそう深まってくるのでした。この

本
福壽司

心斎橋筋大丸前
電話の三三四番

「死んだまね」は一代の傑作だったのでしよう、しかし、それは「死んだまね」ではなかったのです。そこに人生のひとコマがにくらしいほどのたくみさで詠われているのです。

川柳は人生批判の詩だと申しますが、作句のために費される時間は時によっては秒ではかるほど短くとも、人生に対する鋭い眼が平素養われていなければならぬといふのがこのことなのであります。

背広着た日へ百姓の金遣い
(三九七近作柳樹) 太田義流

二十年も前になりますか、四国の山奥の祖谷溪へいったことがありましたが、バスといつても名ばかりのボロのオープン乗用車、それがやっと通ったばかりの時

した。山奥の村吏がこのパスのおかげで戸毎にできた借金をどう払うかに頭を痛め、五カ年計画とかいた刷り物を私にみせて嘆いていたことが印象に残っており、それまで不自由ではあったが平和な山村へ自動車という魔物が侵入して、文化の誘惑に抗し切れなかったからでした。

この句自身は何の変哲もないのですが、恐ろしい社会の真相に喰いさいなまれてゆく姿が紙背に感じられるのです。ここに立派な社会批判があります。

豆秋大人には及はずとも、この句のいのちなる技巧には私は「背広着た日へ」の「へ」を発見しました。これを平凡に「背広着た日の「へ」の」にするのと比べてごらん下さい。湧水のような金のつかいぶりは出てはきません。「ドブへ金をすてる」の「へ」であつてこそ、生きてくるのではないかと思えます。

女体にも一つ女体あるよな
乳房

(三九七近作柳梅) 小川静観堂
乳房は女の象徴、ストリップもパットをつけざされる立派な生殖器です。人前で平気で乳をのませる日本では外国人ほどエロとは感じない。私なんか大人になるまで

乳を見せることが恥かしいもの、見せてはならないものとは知りませんでした。

性の問題は生きていくかぎり真面目な大切なことです。一番底にあるものに根ざしています。

いろいろの乳房、小っちゃいものいやらしいほど張り切った大きいもの、ウエストの線にくびれ込むたくましさ、岡本太郎画伯が日本古代の縄文土器をいやらしいという表現でたたえていられますが、強い生活力につながっているからです。この句からもそうしたいやらしさを感ずるのです。人生批判のも一つ奥の人間批判、生の批判までできているようです。それよりいやらしさといえは今月号の私の句

ザマを見ろ又飛行機がおちよつた

ひとさまを不愉快にしやしないかと心配です。気色のわるい句です。私の醜いひがみや片意地を解剖台の上でさらしているような恥しさを感じます。いばることより、くさることより知らない私の心、カムフラージのしようもありません。

醜さをぶちまけることで善心の片鱗を汲みとらせようとは虫がよすぎます。社会批判のつもりの句

が、こうして活字になってかえつてくるとそんな生意気は消えてしまふようです。素裸を人前にさらして、自由にならぬ自分の心とじかに向き逢ったときはじめて、調和への憧れというか前進を感じもいたします。「いのちある句」への出発点を見つけたようにも思えます。

紳士と

ハンカチ

直原七面山

汽車がY駅を出て間もなく、通路をへだてた斜向うの席で、ウツラウツラと気持よさそうに眠っていた五十がらみの紳士の前に、年の頃なら十九か二十の、目のつぶらな美しい洋装の娘さんが、少し大きめの旅行鞆を片手に提げて乗り込んで来ました。

彼女は静かにその鞆を網棚の上にあげたのですが、どうしたはずみなのか、彼女の手から白いハン

ケチが一枚ヒラヒラッと、こともあろうに、その紳士の大事な一物の真上と覚しきところに落ちました。

彼女が驚いて手を出そうとした瞬間、まんが悪いと云うのはこうした時のことを云うのでしようか。

汽車がガタンと一揺れ揺れたかと思うと、紳士がパッと目をさましてしまいました。彼は目の前に若い美人が真赤な顔をして突っ立っているのを見るなり、急いで目を外らしたのですが、どうも、その目のやり場が悪かったらしい。

彼は自分の又の上のハンカチを見るや否や、なにをどう感ぜいたのか、見るも気の毒な程周章狼狽してす早くそのハンカチを(どうやらMボタンをかけていなかったらしい)ズボンの中へシヤニムニ押し込んでしまいました。

彼はハンカチをワイシャツのスツと完全に思い違いしたらしい。

その手の早かったこと

と云つたら、とても彼女が声を掛ける暇なんかありませんでした。彼女は全く金時のようになつて……

それはほんの一、二分間の出来ごとだったので、一部始終を眺めていた私にとっては、とても長い時間と思われました。

結局彼女は、そのあわてものの紳士に、なんの理由もなくして、大事なハンカチを一枚持って行かれてしまった訳です。が、その一枚のハンカチが、その後どんなに多くの笑いを、人々の間にまき散らして行くのかと思うと、私はとても愉快で、笑いが暫くともりませんでした。早速これを用柳にと思つたのですが、あれからもう半年、いまだに句にまともらず困っております。

御贈答に

大丸の商品券

三五百円・一万円

大阪心齋橋

京、阪、神三店の他
高知、鳥取、下関、
別子、博多に共通

一階 御堂筋側



甲子園出場の野球選手であった昌男氏と音楽さん

川柳夫婦善哉

(7)

昌男と春栄

訪問者 丸尾 潮花

南海本線忠岡駅から約十分、夜目にも美しい色とりどりの垣根バラやアマリリスの花が咲き乱れている府営住宅街に出る。五棟の奥階下、此処が昌男さん夫妻のお住まいである。柳歴二十年の昌男さんは川柳不朽洞会員であり、岸和田川柳会創立当初の同人である。お務めは堺市、職安の課長。春栄さんは川柳婦人友の会の会員で、主人と同じく岸和田川柳会に籍を置かれてはいる茶人。

川柳五月号に

よれよれになつて履歴書
戻つて来

と言うような職業らしい観点から

点について、お二人の意見を聞いて見た。

昌男「そうですね。女性を詠んだ句が多いのは事実ですが別にそうした句ばかり作句していると言ふこともないのですが、そう言うた句が抜けるんですね。外にいい句も作っているんですが、その方は余り抜けないのですよ」

潮花「ご主人のそうした句についてごいけんを聞かしていただきたいですね。女性の句はあまり作って欲しくないとか。旅情の句を作ってくれた方がいいとか」

春栄「そうですね。別に主人の句につきまして深く考えて見たこ

ともありませんし、女性の句を作りましたも作品のことですし、あまり気にもいたしません。うまいこと表現したはるなと感心する時があるくらいなものですよ」

昌男「いえいえ、とんでもない。そんな人はありまへん。第一恋と言うものをしたこともないくらいですさかい」

春栄「かましまへんで、私に遠慮しやはらいでも、ハッキリ言やはたら」

昌男「ほんまにあらしまへん、強いてモデルの女と言えは家内ぐらいなものです」これでは春栄さんが安心して女性の句を見ていられるのも不思議はない。

潮花「柳歴は？」

昌男「本当にやる気になりましたのは昭和十二年頃でした。当時新義州に居りまして父が朝鮮川柳協会、国境吟社などの新義州支部長をしていたものですから、子供の頃から句の清記をよく手伝わされたものです。当時大島濤明さんが選をしていられて、初めて「毛皮」と言う題吟に投句をしましてね。その句が地位に入選しました時はもう嬉しくてね。今でもその句はハッキリと覚えています。

贅沢と別に国境の毛皮服
と言う句ですがそうなりますと、もう柳社も何もあったものではな

た。当時の川柳を見て頂けたら出ていますが、そのために毎月三百句は作句していました。入選句数も七、八千句は越えていると思

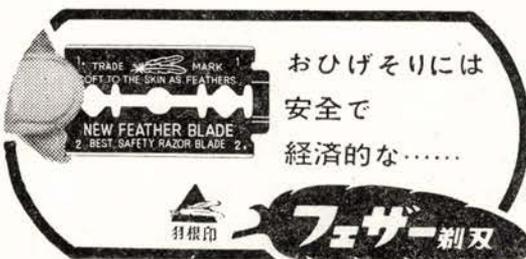
ます。気遣いみたいなものだったのですね」一柳社しか知らない私には全く驚いた作句熱である。

潮花「其の当時から見て句の形とか着想とかは現在と変わっていますか」

昌男「変わっていないと思えます。句も一進一退でしょうか？」

潮花「奥さんも其の当時から作句をしていられたのですか。金泥集や岸せんにいい句を見せて頂いていますか」

春栄「ええぼつぼつね。でも長女が生れたものですから作つたり



作らなかつたり、それも今でも少しも変わりませず、金泥集にも三月ほどご無沙汰をしています。気儘

な作家ですから済まないと思っ
ています。友の会に入れて頂きま
してから色々なお方とお付合いを
させて頂き、句会に参りましても
参者になることや、教えて頂く事
が多いのでとても喜んでます」

潮花「男性の方やお務めに出
いられる方は車中などで作句を
される場合が多い様に聞きます
が、ご家庭に居られますと自然
作句時間なども制約されると
思いますか……」

春栄「そうですね。私などは
お風呂で句を作ると言うので
なしに、句が浮ぶことがあるん
です。そうした時はノートが
出来ませんので、もう帰る
迄忘れられない様口
の中で句をくり返し、くり返
しながら帰ってノットします」

潮花「川柳以外の趣味と言
ったものでは」
昌男「野球ですね。新義州商
業に居ました頃は選手をして
いました。昭和十年の全国選
抜中等学校の野球大会が甲子
園球場でありました時にも
出場しました。最近まで職安
のチームでやっていますが三、
四日腰が痛くて困りますの
でやめました。歳ですね」

ボジジョンはとカメラ班の光
輪さんの質問に
昌男「三聖です」と誇らしく
笑われた。

潮花「奥さんは？」

春栄「お茶です。十七年ほど
になります。主人の母が先生
をしているのですから、主人
も男のお友達が三人ほどあり
ました頃は一処にお茶を習っ
てましたが、その方が皆転勤
をされてしまいました。女の
方ばかりになりましたので、
自然やめてしまいました。心
臓が弱いからいやだなどと言
いましてね」

潮花「奥さんの句は矢張り家
庭に直結した句が多いですね。
お隣の法事庖丁持ってゆき
ドライヤハパパの用事は
メモで来る
のようにお茶をしていら
れますとお茶席の句なども
お作りになると思いますが」

春栄「ありますけれど、句に
ならない句ばかりです。お茶
席の句で、路郎先生の「新
川柳鑑賞」にきさ子さんの
句が出ていました。に感心
させられました。」

昌男「うまいですね。友の
会にはいい作家が居られま
すよ。今年川柳まつりの楯
にいとむの地位は阿茶さん、去年はきさ子
さんが地位でしたが、来年は友の会
で楯をもって帰られるでしょう」

潮花「たしかに友の会では
ライバルでしょうね。どっち
かが倒れない以上、大万川
柳でも闘かわれるだろうと思
います」
春栄「柳友と言うものはい
いと思います。傷付いても、
どうして。新義州に居まし
たころ仁川支部の方で多久
島朝子さんと言う方が居ら
れました。文通をしていま
しが終戦後お弱い方でした
ので、どうしていられます
か。時々思い出すことがあ
ります」
と遠い日の見ぬ柳友を懐かし
そうに追いつながらお茶を
たてて下さる。訪問者もカ
メラマンも此のお睦しい二
人三脚の川柳家がいつま
でも一男一女のいい父であ
り母でありそして川柳への
情熱の火がいつまでも燃え
つづけていられることを願
ってお別れした。戸外は
暗く大粒の雨がポツンと
落ちはじめた。(カメラ・村
山光輪)

あなたの鉛筆は

4Bですか

句会に入選した句を清記して
もらっているが、編集にかか
るまえ念のために誤字がし
をする。正確に楷書で書いた
句には、さ

すがにまちがいはすくない
が、違筆なくすし字に、その
上うすい鉛筆ときては、つい
間違いもできようというも
のである。
原稿の文字は、ペンか筆で
楷書で大きく、ということが
鉄則である。

柳歴からいっても、選者組
は老令の方が多いのだから、
4Bで書くことは、選句をし
ていただく上からも、読み
よくするのが礼儀であろう
。苦選させない句箋は、4
Bで大きく書いた名句とい
うことには、とにかく句会
には4Bという合言葉で今
月から実行してほしいとお
もう。(F)

スター作りの名人

川村好郎氏のこと

哲学者ともいわれた大喜劇
役者チャーリー・スペンサー
・チャップリン氏の、自作
自演自監督で撮るすべての
映画が、世界を風靡した
ことは誰でも知っている。
一本公開すること、新手法
が発表され、これは、

くろうと仲間でも舌をま
いていたのだが、それよりも、
出演する俳優がみんな無
名人ばかりなのに、チャップ
リンの指導をうけて一本撮
ると、そのたった一本だけで
一躍スターの座を確保して、
各社から引っぱり風になっ
たのである。日本のように
俳優本位でないことに、チャ
ップリン映画のよさがある
のである。もちろん素質の
ある人を探してきて、そこ
でチャップリン式に鍛え上
げられるのである。
川柳まつりの路郎賞受賞作
家の田中狂二氏、本年の井
阪東天紅氏と、いずれも川
村好郎氏が指導された逸材
ばかりである。ことに東天
紅氏はわずか一年でこの大
賞を獲得したのである。好
郎氏の指導力の偉大さは、
あの優勝楯のさげんたる
輝きなのだ。(F)

スマートな心地のよい
O.S.K. レイキード
大坂商店
大阪市東区南船場一丁目二番地
電話(94) 745-5463

娘・妻・母



中島小石
武部若菜
藤村梨花

娘

藤村梨花

編集の三夫さんの御葉書を頂いて驚いた。そうそう私はまだ娘やっとなあーと。

昔から「早よ嫁に行かんと墓が立つ」と云うが私の場合とうに墓が立つて折れてもたという所である。因果な事に私の友達にはこの墓の折れたのが多い。大へんな鼻息で生活をしている。まさに男性飼育になりかねない。私はその中で最も影がうすい。

「娘はん」「とうさん」「こいさん」「いとはん」とどれもニュアンスの素晴らしい大阪の言葉である。しかし今、こんな娘がいたらお目にかかりたいと思う。まだ幼い頃お向いのお嬢さんが可愛いメリンスの帯を締めて、お針に通っていたのを思い出す。そこはかとなく感じる甘さ、淡桃色のスイートビーのようなムードを今でも目の中に思いうかべる事が出来る。

あの頃は絹張りの日傘や美しいレースのパランソルがはやっていった。いつの間にか私も大きくなったらあんな人になるのやと思っていたら大違い。「大和撫子」とやら、何ともやわらかいのやら硬いのやら解らんかったいな名前を頂いてハンマーや、ボール盤の音すさまじい所へ色気もそっ気もなく、カーキ色の服と共にはり込まれてしまった。私の夢は無残にも敗れて、今日の性格形成の一つとなった。

無批判に戦争を有難がったのではなかったで、先ず働かされる限りのこちらも好んで来たのではないので環境をととのえてもらうよう要求した。所がどこやらの政府にも似てのらりくらりと逃げられ、婿もあかんで今日でのストに近い事で会社当る事にした。どうも人の後からついて行けないらしい性格がこんな時にも災いして、校長からも、会社からも「君は女でなかったら、とうの昔に憲兵隊行きた。」とこっぴどくやられ

た。こんな若かりし日を送ったのでいつの間やら「娘はん」のムードなんて針の先程も持ち合わさぬようになった。このように先ず人生の夢豊かな時代をむざむざと奪われて、現在墓の折れた人間となった。

東ね髪いつかりボンの夢も去り 梨花

私の事はこれ位にして、毎日ハイティーン・ガールと云われるお嬢さんと暮しているの、その群像を二、三スケッチして見よう。仲々しっかりしている。御年配の向きにはこれが突にちゃっかりと見えて「今どきの娘わ」と嘆かせている。けれども必要以上にはいかんだり、尻込みをしない所など愛玩用にはならないかもしれないが実用品として少々のも事でこのねない感じがする。この間も卒業の目的をアンケートすると「就職欄」へはつきりと「結婚」を書き込んである。「永久就職、なるほどな」と数多い先生をうならせた。又一方「マナービル」に興味

を持つているのやら「舞踊の師匠」と云うのが居る。本人は大へん真面目なのでこれからの努力と経済面の負担をどうするのかと聞いてやったら「先生御心配なく、よいパトロンをさがします。最初から結婚しようとは思ってません。」としごくあっさり割り切った云いようなのでお父さん、お母さんはどうなのか問うと、「我が道を行きますわ。」

又こんなのも居る。将来生物學のプロフェッサーになりたいとねじ鉢巻である。研究の対象は「猿の脳」まさかあだ名通りでもあるまいかと先生の首をかき上げている。決してふざけた娘でもない。「三尺下って師の影を踏ます」はどうに博物館行きの諺となったが、廊下ですれ違えば親しげに「やー先生、きれいやわー、どこ行き？」と肩でたたきかかねない。日やけを苦しめた先生にもすかさず「先生ええ色、悲観は禁物それを生かさなくちゃー」と、ぶんぶん怒らせる、それでも若い男子先生はこのドライ娘に女を感じてる事があって困るとは内緒話である。

不明だと云われた位で、姿こそスカート着用はしているがする事すべて男性そのもので声まですっかり男声である。しばしば壁越しに驚かされたものである。ある先生が、トイレで「どこの男の子が入って来たのかとぎよっとした」との報告であった。因みに私の学校は女子ばかりなのである。こんなお嬢さんでも年と共に「人間本来の姿」に戻ららしい、皆々大発見をしたような顔で帰る後姿を見送った。「何にも心配せんでええな」とは老婆心のため息であった。

浮世の風の一審少い場所ですえこのような次第であるから社会の波を巧みにすいと、くぐりぬけ泳ぎ廻る、当世娘はなおさらの事である。日本人は「良きを進め悪しきを捨て」国民であるからやがてこの過渡期も無事切り抜けてびちちとした素晴らしい娘が天地に満ち「今の娘は」の言葉を返上すると信じている。かびの生えた娘の迷懐よりも、生きのいい娘達の話の方が皆さんにも一眼の清涼剤ともなり、茶飲み話の話題にして頂けると思う。

とうはんと採手昔のまま

来る 梨花

まだこんな昔の船場の番頭さんが来る。この人はこの世にさよならを告げるまで自分の言葉の中で暮らす人であろう。十年一と昔、娘さままでである。

武部若菜

赤い手柄に丸まげの大正も末期の姿で岡山駅に立った私は兄や弟の笑顔に送られて生涯への旅にスタートを切ったのである。今まで

兄だった人が、車中で心易く話しかけてくれてくさくさして、なるべくだまっていた花嫁である。商家に育ってサラリーマンの妻に乗り換えて、はるばる異郷の旅へと胸おどらせたあの日、あれから三十八年も過ぎたようにおもえない。

ちょっと大阪にいたが、中々異郷の人にも言葉にも親しめなかった私の弱い私は、食事の仕度が精いっぱい、母の帰って行ったあとの心細さは、今の花嫁に笑われるだろう。しかし間もなく神戸に移ってみると、又ちがった雰囲気です。ホッポツと親しめるようになった。

西灘村の酒蔵が並ぶ町を大石の浜へ散歩に行ったり遠くない山手を走る郊外電車をめずらしく眺めたり、頼りない花嫁はよく歌をうたったり、本を読んでくらし。かくて三年目第二の故郷となった大阪に住む事になってから気弱な妻にも試練がはじまった。叩かれては強くなり冷めた他人との接触を憎す毎に自分を練磨して行った。

あまり丈夫でなかった主人が疲

れを出したり気管支カタルにかかったりなど早くも神戸時代私の介抱係りは始まった。よく今日まで命の持ちあわせがあったものだと思ふ。それ程主人の健康について

は気をつかった。五月号の川柳塔に水堂さんが
近松の筆になるよな夫婦愛
なんて私達のことを詠んで下さったが、何だかこそばゆくて、主人もこんな句を出されたら、うっかり

喧嘩も出来んなあ、と笑っていた。ほろかすに云われ笑顔のままの妻
よその奥さんを詠んだのである事は申すまでもなく、男性側はこの

ような妻にとても魅力があるらしいけれど、私は遺憾ながら同権を保持している、とは云え権利の行使もお互いの人格尊重と愛情にまつべきは、男性も女性も同じであらねばならぬ。李ライインのように

むつかしく考える必要はない、愛情の欠けた抑圧は男性自身けいべつに値いするからである。
二世までも嫌と女の笑いあ

い
若菜
あるような離婚成金や相当階級の夫人とか云われ乍ら週刊誌の種になった気ままに独善的な勇敢夫人は女性の風上にも置けない気がする。

日本地図が端折られたときから店を焼かれたわが家にもいく多の推移はめぐり、主人も敗戦と日

を同じく頭を丸くしてしまった。路郎先生が「君又伸ばしな」と仰言ったそうだがすでにグレーに

衣替えしつづつあったのと顔の方が段々上の方へ拡張を予定していたので刺つてしまいうに手回ひまは

からない。
還暦を迎えた主人の写真は川柳家の二十四時に出て頂いた。あの原稿も私が代筆せねばならぬ程

になっていたが、その後間もなくその記事の二十四時も書き替えねばならぬ日が増えてしまった。大阪の空気がすっかり解け入っていた

妻が又元の岡山へ帰る準備を始める頃、ラジオが唄っていた。さよならさよならの歌謡曲がたまらなく胸に沁み、温かい柳友の方

々々に御見送り頂いてやっとなんたりから落ちつきを取り戻して今度は私の方が多くしゃべった。窓外の説明にいつしか二人とも旅の心になっていた。

ずっと前に何かの本に二組の夫婦がお互いに相手を交換して見た

が結局元のままでよかつたという

ような事が出ていた。ちゃんと揃っているものを取り替えて見たところ

で履物の片っぽが変わったよう

なものではなからうか、いつも主人の足元計りを付けていると他の者

と歩いては苦笑する事が度々ある、いつと知らずに履き馴れた下駄の片っぽになつてはいる自分を一人で笑つてみた。

母
中島小石
私が昨年一月急病で倒れて病床にあつた時の事、食欲がなくてこ

金泥集

選乃菫生麻

「顔色」

リベットの欲しい顔色読んで来る	阿茶	顔色を先妻の子はよく見分け	花奈女	顔色でダイヤル廻す子のあわれ	酔夢
未決から出た顔色で礼に来る	同	本心に触れた顔色読み取られ	春栄	顔色をちゃんと見ぬいて側にいず	悦子
顔色の退院遠き東ね髪	都詩子	顔色の変った方へ嫌疑かけ	周甫	ワンマンの顔色秘書はサツとよみ	二三子
顔色を変えて人出に子を探し	同	顔色も読み馴れ秘書の板につき	美首子	顔色に見せず大望胸に秘め	小菊
顔色に出さぬ相手で気がつかれ	清子	顔色は見せずに済んだ電話口	若菜	お人よしその顔色がかくされず	万女
顔色のさえない朝のルーシ濃く	あやめ	クリスマス七面鳥は尊ばれ	知恵	お見舞は顔色はめただけで去に	たつよ
黙香権刑事 顔色見逃さず	一栄	何思もっているやら顔と別の声	梨花	顔色はわるとさわぐ愛犬家	ちあき
		あびる程飲めば顔色あおくなり	美代	顔色をはめて術後を力づけ	奈良子

次回題「山」 〆切七月末日

絵と川柳で表現する歴史 (第七回)

戸田古方

⑫ 縄文式文化時代

BC900-BC300 (600年) 縄文式文化時代



類のものを描きくらべてみました。

このいい方は土器の特長から来ているのであります。一番

上には地図の上には土器がならんでいますが、それでのちがいが分布の様子を見て下さい。

縄文式は、文字通り縄目の模様がついていまして、手づくりでつこつこはしていますがたくましい、あふれる生活力をみながらせています。その他の道具も石でできたものが

次の弥生式時代とともに、われわれ日本人が、この土に住みついて最初にきずき上げた文化であります。したがって、そのかわり具合がひとつとわかるように、この二つの

各々のまんな中に、時代を代表する生きるためいとなみに一番大切なもの、狩猟、漁撈と農耕をかきました。勿論、数字が示すように縄文式時代から弥生式時代へと進んでいったのでありまして

まっていたら、長男が私の大好物のキツリ巻の折をさけて帰り、これなら食べられるだろうと云ってかれ、又二男は病氣ときいて東京からバイナツブルーツがらさけて突然帰って来て、これお見舞と差し出してくれた。三男も床の中で呼んでも聞こえないといけないからと呼節の紐を長く長くして私の床の中まで届くようにしてくれた。常日頃はやさしい言葉一つかけるでなし、男の子なんてつまらないものと愚痴を云つて私だけれど、この小さな折一ツ、バイナツブルーツに胸いっぱい、涙があふれ出る嬉しさであった。子は呑んでいるとも知らず寝ずに待ち

入試失敗の夜の夕餉に気がつかい

こんな苦勞も一度にけしとんで、子供達の心遣いに母としての私は満ちたりた氣持で病床を早くぬけ出したいと思つた。

母いよいよ小さくおはし遠者なり 夕鐘

夕鐘氏の句の通りのような私の母が八十才に近く東京にまだ健在している。父は生々庵と同じ業陰武士の流れ、しかも一世代前の人とあればなかなか氣むすずかしく、几帳面な人であった。その父との中に八人の子供を持ち、数年前父が亡くなるまでの五十年の間の母の苦勞も一通りではなかつた。一人斃死し一人病死させて、今は二男四女とその配偶者、孫十六人曾孫一人のおばあちゃんである。この二十数人が入れ代り、立ち代り、たずねて来るのが一番の樂

しみのようである。その中で私一家だけが遠く離れているので、私年が何度か上京して来るのが殊の外嬉しいらしい。私もつい忙しい日々であるから一泊か二泊の上京ではあるけれど、来ると聞けば居てもたつてもおられぬ位待ち違いらしい。着く日には、東京駅から家までの時間をみてまだかまだか入口を出たり入ったりして待っている。

顔をみるともう涙一ぱい、ろくに挨拶も出来ぬ位、皆は元氣かお前は体は大丈夫かと一しきり、それお菓子、それ果物と小さい子供が来たように少々めいわくな位のサーピス振りである。私も何か母の好きなものを抱えて出かけてゆくわけである。そして一晩床を並べて寝物語に夜をふかす。

伴せを母のいびきの横で知り 大八

もう明けの日は私は帰らねばならない。母はもう帰るのか帰るのかと淋しそうに涙をためて門の外まで、町の角までと見送って来る。無理をしないように、体に氣をつけてとどくと繰返しながら別れをおしむ。私もこの次来るまでどうぞ遠者でいてくれるようにと祈る心で一ぱいである。

よく上京なさいますね、と人に云われる程上京するけれど、せめて老い先短い母の生きて居られる間、一度でも余計に会いにゆくべきだとの病床にいた時の自分の心に照らし合せて考えている。こうしてやさしい心遣いをしてくれる三人の子供を持った母としての私、そして五十過ぎまでこの身を案じてくれる母を持った私、

には出来ていなかったようでした。

○ 大漁の鯛ばかり喰べさせ

焼き上げてあっちこっちにある指紋

◎ 彌生式文化時代

だいぶん、いろいろの点で進んできています。いちじるし

がはじまり、さかんになつたという事です。これは、いち早く、西方の大陸から米をつくる方法を習らつたからであります。日本人はこ

のころから、米をたべはじめていました。石の道具のほかに、金属の道具もみつかり、その上たま

たまよく保存された、上手に細工をほどこした木の道具ものこっているのです。丁度、今から二千年前頃を中心にして

ているのです。

時代のよび名が示す土器も専門の土器作りの人の手になつたものらしく「ろくろ」という工作道具をつかつて、

早く、均一に、しかも沢山出

来ました。それ程人々の社会

も大きくなってきています。た。



BC3-2C-AD2-3C (600年) 弥生式文化時代



豊年に富士鳴動がおさまらず

住居も山の端から平野にのりてきて、すでに小国家も出て来たかかっています。ゆきき

していたと思われる大陸の書物にもそのことはかいてあり

ます。

最近有名になった静岡県の

登呂はこの頃の遺跡です。

○ 試作したろくろで土器を

試作する

試作する

私は本当はこの世の倅せ者であることを、この文をつづりつづ、しみじみと感じた事である。

★ 新おくりがな

不二田一三夫

昭和34年4月11日、内閣総理大臣岸信介の名において、「送りがなのつけ方」を告示した。

これにも反対の方もあるとおも

うが、これにはデモをするほどの人もなかる。当用漢字、現代か

なつかい制定の趣旨徹底を図ると告示にもあるが、活字と共に生き

るわれわれはでき得るかぎり協力することが、ムダを省くことにも

なるとおも。

前月号の近作柳樽から、また句

を拝借して、ともに勉強していきたいとおも。

良い嫁と云われこんなに掌を

荒し 蛸 蛤

荒らしであるが、公用文は「荒し」となっている。この文字の読

みちがいはなさそうである。「ら」がなくても「アレス」とは読むま

い。同情をして泣酒に抱きつかれ

泣き酒である。 可住

定年はサツサと送り呑み直し

可住

おくりがなのツク外だが「呑み」

はいつもいうように「飲み」である。停年を定年としたのだから「呑み」がよい気になる。

寂しさは老人病が一つ増え

晃 康

「老人病」ならこれでいいが、「老人病」が一つ増え」なら、病いである。

離れ家のよきは押し売り寄りつかず

みもの

「押し売り」とも読むまいが、押し売りである。

オールドミス嫁ぐ荷物に追越され

よしあき

追いつかれ。

潜在の意識が酒の酔を借り

可笑

酒の酔い。

昨年、穴埋めに「ずとづの使い

方」を書いたとき、「新妻」は「に

いづま」で、「稲妻」は「いなす

ま」としたら、「妻」がなせ、「づ

ま」になったら「すま」になるのかと問合せがあった。

再記する、新妻は「新しい」「妻」

で二語になるから旧かなで「づ

ま」とする。「稲妻」は一語だから「ず」を使って、「いなすま」

となるのである。

二語は旧かな、一語は新かな

と、いうようにおぼえてもらうと

便利である。

すばらしい 着心地 蝶矢 シーツ CHOYA SHIRT CO. LTD



研究題「権利」



清水 白柳

今回の研究題は抽象的な題で作句しにくかったという添え書がたくさんありました、題が抽象的なものであっても、その題にとけこんで題を消化しますと佳い句が生まれることは今回の集句を見て頂くと納得していただけたと思えます、今月は私に少し心の動揺することがありましたので思うように落ちついて書けなかつた事をお詫び申し上げます。

1 一票の権利に代議士頭下
げ K

2 一票の権利へ高い頭を下
げる S

3 一票の権利へ公約世辞と
なり S

4 一票の権利僕のは義理に
負け 愛鳩

1 2の句のように頭を下げたと
いうだけでは句になりません、3
の句の世辞は、何故世辞になった
のか判らないのです、この四句の

うちでは、4の句が正当に使用し
なければならぬ一票の権利が義
理に負けたと作者自ら告白してい
る点がやや面白いと思われました
1 権利金目の玉飛び出す程
とられ R

2 権利金とられてたつた四
帖半 T

3 権利金鬼門があつて削ら
れる 敏子

4 屋根うらを借りても権利
金とられ 一鶴

1 2の句は権利金をとられたと
いう説明に終つて居るのですが、
3の句になりますと、鬼門という
ものを持つてきていますが、そこ
にまた、この句の難点があるの
です、どんな家にも鬼門という方角
があるのですから、鬼門に何か不
潔な場所があるとか、家相に悪い
何かがあるから権利金を値切つた
という句なのですが表現は不備な
点があるようです、4の句は屋根

うらという具体的なものを持つて
きたので、この句は成功している
と思います。

二タ言目権利で妻の座を固
め 生薑

上五の二タ言目が面白いと思
いました、着々と妻の座をかため
ゆく夫婦の生活をしんらつに描き
出して居ます、恐妻家になりつづ
ある夫の姿も、えがかれて面白い
句です。

当然の権利のように甘え出
し 豊年

若い夫婦の生活を詠んでいます
が、この句の場合、権利という文
字の使い方に作者の手腕を見るこ
とが出来ようです。

産む権利妻にだけある共稼
ぎ 敏子

女性の句ですから、産む権利で
しょうが、男性側から見ると権利
というよりも義務のようにも見る
ことが出来るのです。句主の名前
がない場合、その判定にむずかし
いものを持つている句でありま
す。

同権も言わず重荷に堪ゆる
妻 周甫

二タ言目の句と反対の立場にあ
る妻を描いて成功しています、一
寸気になることは、堪ゆるのゆで
すが、これは堪えらるゝとしてもいい
のではないかと考えられました。

1 首切りと人権ストの深刻
さ S

2 村八分への人権へ湧く世
論 八九寸

3 生きる権利か知らんが斗
争あきあきし 一鶴

4 憲法にある権利だが職が
無し 豊年

1の句は深刻がつて居るだけで
説明に終つて居るように思いま
す、2の句の村八分は着想の面白
さがありますが、湧く世論とやや
投げやりの表現を使つて居るの
が難点のように感じられました、
常套的な語を据えたために句が平
淡になつたといえます、3の句は
もう一步突つこんだ批判がほしい
と思いましたが一応は点に入る作
品といえるようです、4の句は、
2の句と同じように投げやりのな
下五を使つて居りますが、職が無
しという、失業している現実味の
あるものを句にしているのが、同
じ投げやりの手法を使つても成
功した原因ではないかと思いまし
た。

お土産に権利顔して子が並
び 弘村

権利顔して、が生硬な感じを与
えています、権利あるよに、とで
もしますと少しはよくなるよう
です!

子は親に育ててもらふ権利
とか 村諷子

親には育てる義務があるので
から、子は育ててもらふ権利があ
ると言うのは、その通りなので
す。

がそれだけでは題の説明にすぎま
せん、権利とか、という二字によ
つて作者が何かを現わしたかった
のでしようが、これだけでは無理
だろうと思われまます。

権利だけ言うて実績ともな
わず 周甫

実績もないのに権利だけを主張
している矛盾をついてはいますがそ
れだけに終つて居るよう思われ
るのは惜しいと思ひます。

権利はないが性分みて居れ
ず 静水

捨てて置けばよいものを、出し
やばつた事をしたという内容の面
白さを感じました、性分は性質と
いうことですが、この句の場合は
性分という文字が活きているよう
に思われます、性分の接ぎ目へで
と一字入れて、性分で見居れず
としたいと思ひました。

権利ばかり主張して居る民
主義 蘭

自由、自由というばかりで、そ
の自由には社会道徳という裏づけ
がなければならぬことを忘れて
いる人々に耳の痛い作品といえま
す。

姉妹均等割に肯んぜず 弘村

姉だから一寸でも多くもらいた
いという人情を句にしています、
肯んぜずという固い結びが、均等
割という語とマッチして成功して
いるようです。

長いものに巻かれず権利振り廻し 保夫
 ことわざを句の半分も使っていて、成功しているとは言えませんが、まずまずというところでしょうが。

雀言う権利与えよ保護鳥の 静観堂
 小鳥の中のかよわい雀というものにてえて暗示しているものを見つめたいと思います。

1 鬼婆のようなのが車内ねめまわし S
 2 腰掛ける権利があつて立ち通し 豊年
 3 週刊誌まで一役の座席権 八九寸

1の句は文字からくる感じから言っても、内容からも失敗していません、2の句は満員の車につめこまれた憤懣ともとれますし、映画館などの場合にもどれるので幾分損な表現の仕方だと思いましたが、3の句は週刊誌で座席を占領して置くのを詠んでいますが、帽子を置くとか雑誌を置いたとか相当に詠まれて居りますので大分損ですが、週刊誌までという処がこの句を成功させたでしょう。

人情にまけてしまった借家権 愛鳩
 借家権という言葉があるかどうか知りませんが、借地権、地上権はあることを知って居りますが、併し理屈ではないのでこのままでもいいでしょう。

権利じわじわ人情をえぐり 舟遊
 句の意味はくみとれますが、何か物足りないものを感じますが、それは、抽象的な表現だからでしょうが、これはこれでもいいのではよう。

権利すら捨てて出て来た故郷遠く 笑太
 何もかも捨ててきたのでしようから、あえて権利すらと言訳けめいた言葉が要らないのではないかと思います、この言葉が余計にこの句を弱くしているようです。
 丸くすむことなら権利捨ててよし 静水
 人間味のある句で、権利という抽象的なものをよくこなしてあつて、佳句といえます。
 チャンネルの権利日曜だけ譲り 敏子
 課題吟の題を見つめるといふことは、言うは易いが句にまとめるとなりますと、仲々思うようには行かないものです、題に引きずられて、題の説明におちいり易いものですが、権利というものを軽く詠んで成功している。

五田玉だけでお菓子を食う 東天紅
 今月の集句の中で一番面白いと思いましたが、あみだくじか何かで五田出しただけだが、買うて来たお菓子はみんなと同じじょうに食べるといふことですが、権利

名句は跡継ぐ
 河本南牛史

麻生路郎先生の名句 庵に似よ。そのままの出来事が、南牛史の初孫と、前田伍健師の社頭の対面なのです。毎年旧暦正月七八九日の三日間に十万人の参拝者がある。松山市の南方二Kの通称、お椿さん。緑起の神様こと、伊予豆比古命神社の御大祭に、鎮座二千五十年式に、神社御造営用に要する、銅板瓦の裏面へ、歌なり、句なり、又は御祈念の事柄を記入する。受付係り、川柳部では、南牛史が務めました時に、県知事、其の外名士が沢山見えられて揮毫されました。二月四日(旧正月八日)午後五時、前田伍健師も参拝されて
 生きのびて今年も詣る椿祭の句を書かれて、銅板代寄附金を出された時に、御代はよいですよと申せば、日頃の潔癖を混わされ
 て、南牛史にはない、神様に奉納するのだと急所をさされました。
 折よく、南牛史の孫も米合せて居ました頭をなでさすって、「じじに似よ、元氣であつていつまでも」
 附記。翌朝二月五日卒中で、以後は昏睡状態にて十一日に逝去。享年七十一歳。
 法名 伍健院釈晃慈照居士
 俗名 前田久太郎
 この御言葉の、じじとは伍健師のことと歎んで居りましたら、本當のじじ、南牛史に似てもよいではないかと言われ、うれしいです。
 伍健師は早くより、父の許を離れて、母と妹さん二人で松山に米り、伊予鉄道KKに停年までお務めになられた方です。其後はひたすら川柳其外芸能を御指導下さいました。若い頃は言い知れぬ、御苦労があつたらしいが話されませんでした。
 奥さんの御話では、原籍香川県坂出と申したのも、実は香川県高松市片原町が本当らしく、又奥さんも再度目で、先妻は寿美さんとか(現在御存命にて此の書御氣付のことは御免下さい)申され、母親(伍健師の)に当りがよくなかったもので、親にはかえられなかつたので、今の奥さん、マチエさんとの仲に一男二女、皆、縁付かれ、御孫もあるよいおじさんでした。

早い効き目! よい匂い!
 安全殺虫剤
 旅行・登山等御携帯に
 自噴式罐入
 アースエアゾール
 木村製菓






路

集

消息

尼 綠之助 選

消息があれば次男は金のこと 市郎
 消息は事件を起したのでわかり 秋月
 殺人犯として消息を暴露する 徹也
 消息がわかって二男もいる温泉 竜蔵
 雪山に又消息を絶った記事 万女
 一枚のはがき消息つきとめる 白葩
 消息は東京にてと記しただけ 秀峯
 消息を拝み屋あつまり西にする 実男
 方言で故郷の消息聞くビール 八九寸
 消息はえらい儲けてはるそうな 保夫
 臨終へ子の消息を伝えて来 鶴汀
 消息によれば独身まだ通し 同
 移住してからの便りがそれつきり 卯之助
 消息のないのを嫁の罪に着せ 敏子
 消息は満州以来二十年 宵明
 消息を知られたくない露路に住み 同
 消息のない子に嫁を見せに来る 伊津志
 亡命の消息地下でキヤッチする 山椒坊
 別れても消息だけは囮んどり 圭井堂

落警の消息通風筒はたし 瑞歩
 成功をするまで消息たつときめ 雪美
 符箋三枚ついて消息戻って来 祥月
 まだ何の消息もなし風は風ぎ 蜻蛉
 老眼鏡かけて消息読み直し たけお
 消息があつたへ近所の顔も集り 光郎
 消息を絶ち十年へ子の背丈 魁光
 駐在所から子の消息が届けられ 同
 人の嫁く話をよそに病みつづけ 妖人
 消息をあれから絶つたモンターシュ 蓑流
 貧乏をしたのか消息途絶えがち 尚史
 消息を聞かれることもない落目 同
 憶測もされて消息伝えられ 宗太郎
 警察と別に消息追う活字 兼治郎
 消息が判らず誤解もはぐされず 藤波
 ライバルの消息あの世から見つめ 雄々
 お父さんお達者ですかと無心来る さんたく
 停年と共に消息切れてなし 笑太
 突然の消息やっぱり金のこと 井蛙
 待ちわびた母へ消息読みたらす 同
 觀光は桜つつじと如才なし 豊年
 消息がわかればもはや過去の人 庸佑
 無事ついただけの便りが来たまんま むじな

消息をメモして帰る 同窓会 章道
 消息欄同期は皆んない子持ち 幸三郎
 ライバルの消息今はなつかしく とし子
 アナウンス消息筋からと念を押し 一生
 制服をぬいで消息断つてしまひ 明子
 誘惑の街へ出てから便りなし 夏子
 消息がおきない頃の夢をよび 二子
 消息へライバルに斗志もやしい 愛鳩
 消息があればあつたで無心なり 吸江
 筆跡は伴どっかで生きており 代仕男
 消息を母はうすうす子の家出 和二郎
 消息はなくとも臉の母は生き 生薑
 消息は生所知らせぬ片便り 古心
 消息に尾端がついた家出の子 十九平
 消息は噂通りでくさらせる 雪峰
 消息欄にのつて名士の列に入り 恵二朗
 消息の実物子を連れ妻を連れ 同
 消息の最後 如才のう無心 ひか平
 消息に何時しか僕も忘れられ 同

住 作

消息はビッケルだけの人となり 敏子
 消息を絶つ寸前のキイを打ち 秋月
 消息は背い目の子を生んだまで 宵明
 弟の消息ボリス尋ねて来 静水
 消息の途絶えてからの二十四時 蜻蛉
 消息を他人のことにして聞かれ 魁光
 色々にさく消息に又迷い 失名
 ちぐはぐの消息にわく同窓会 淀月
 消息を陣空あきるほど知らせ 雄々
 手を合わす気持も入れない 尋ね人 翠々
 消息通何やらデマを又飛ばし 雪峰
 消息をきかれてうれし子の出世 恵二朗
 消息は妻に苦勞をしてるらし ひか平

消息が判れば腹が立って来る 実男
 地 風だより生きているから悲しませ 代仕男
 天 消息が絶えてアンの無理を衝き 十九平
 軸 消息を鼻で笑つたコップ酒

世 渡り

真鍋一瓢選

世渡りの化粧落して子を抱き 周南
 世渡りの不満坊主になり切れず 可住
 世渡りが上手議員にまた押され 市郎
 世渡りが下手で研究室に残り 不村
 世渡りのうまい割には貯めていず 弘道
 世渡りは嘘も云つたり云われたり 秋月
 世渡りのうまい亭主が鼻につき 徹也
 世渡りの終着駅で孫の世話 竜蔵
 箱入りの妻世渡りの苦を知らず 万女
 赤字又赤字世渡りくたびれる 白葩
 節くれた指が世渡り物語り 秀峯
 世渡りの嘘もつけます金を貯め 葵丘
 世渡りの趣味とは別な碁を習い 実男
 世渡りの下手な男へ文化財 九紫
 昼寝して上手に暮す未亡人 定月
 世渡りの下手なとこで親に似る 竜昭
 綱渡りみたいといわれよい暮し 八九寸
 甘いことでは仲々世の中渡れまん 初甫
 世渡りへ時代のずれを知らされる 保夫
 世渡りは上手で金はためていず 雪美
 金もない奴に世渡り教えられ 鶴汀
 活かす三味母色街で世を渡り 隆史
 世渡りのうまさお世辞も技目なく 卯之助

愛嬌で世渡り出来る顔を持ち 敏子
真ッ直に生きて世渡り下手でよし 静水
よすぎする人あり防空隊の煙 伊津志
世渡は下手でも堅いお人柄 繁太郎
世渡りでなくてガムシッ生きて来た 弘村
世渡りのコツを質屋にきてさとり 九呂平
世渡りに馴れ要領もちと覚え 昌男
世渡りのコツ上役の猫も寝め 山椒坊
そつのない男に惚れてこの苦勞 圭井堂
最低の線で世渡る コップ酒 蜻蛉
世渡りは妻で結構持つて居り 忠三
世渡りに都会の風は冷たすぎ 忠太郎
世渡りのコツ麻雀も習うとき たけお
世渡りのまさきが無口の子に育て 光郎
爪染めてからの世渡り面白う 魅光
世渡りの世辞は赤子にまで及び 紡毛
世渡りの疲れ療養所へ入る 妖人
世渡りのコツだと妥協させられる 史風
無いようである縄張りでボスは生き 淀月
世渡りは妻に任かして顕微鏡 尚史
世渡りも男に負けぬ花名刺 兼治郎
世渡りに二号の腕も利用する 雄々
世渡りの笑顔を息子はがゆがり どんたく
ドヤ街に来て食うて行く事覚え 敏明
世渡りはこも看板書き替える 笑太
煙草一本世渡りの役に立て 豊年
変人は変人なりに世を渡り 愛鳩
ムンペンにあればなつたで要る仁義 代仕男
世渡りの手始め直す 国訛り 生薑
ボンボンの世渡り田畑売りに出し 孝風
無口者世渡りのコツ知っている 弘朗
金ためてためて世間を狭く生き 雄声
七転び八起きニコヨンまだ続き 雄水
世渡りへ神の仏の占いの古心

世渡りの秘訣嫁ぐ娘に教えこみ 蘭
腹芸のさても見事に世を渡り 恵二朗
世渡りの不運ばかりがつきまとい 圭木
世渡りが少し解つた倦怠期 雪峰
佳
世渡りとしての井戸端会議する むじな
済んまん済んまん世渡り如才なく 一鶴
世渡りのひげをちよつぱり伸すなり 夜潮
世渡りにしても夫のみじめすぎ 宗太郎
その裏は知らず善人世を渡り 義夫
五客
世渡りの夢一つ消し一つ消し 和三郎
世渡りの苦勞人相まで変り 藤波
善人の世渡り損を又重ね 十九平
世渡りの秘訣少しは飲めと云う 幸三郎
世渡りの見本をべんやら見せてくれ 井蛙
人
世渡りのともかく長いに巻かれ 蓑流
地
世渡りの下手を叱つて少し貸し 晃康
天
世渡りの下手な見本を平で退き 宵明
軸
世渡りは硫く牛を見ている田螺

婚 期

高橋操子選

三人の婚期へ父も慌わて出す 周甫
何処へ嫁くつもりか英語まで習い 可住
我がふりに気附いた頃は婚期すぎ 不村
婚期など言うておれない母がわり 弘道
人生は忙し婚期も遂にがし 秋月
春の緑八卦は秋にしてしま 旅風

婚期きても人気が稼業はやめられず 童蔵
セーラ服脱げば婚期が待っている 白葩
とやかくと婚期遅れて噂され 秀峰
水泳日本しぶきあげている婚期 葵丘
娘もう島田結わせてみたい 輪実男
我儘に婚期もそしらぬ顔で逃げ 裕邦
親一人子一人婚期また延びる 定月
婚期過ぎした孝行買められる 八九寸
三十には三十の縁あり婚期見送る気 初甫
茶に華に婚期へ見えぬ荷を送り 鶴汀
病身の母を援けて婚期すぎ 晃康
出戻りの噂出るほどミスも老け 敏子
松葉杖せめて婚期の太鼓帯 宵明
婚期もう気にせぬ勝気に養われ 静水
ナースという職が婚期をおくらせる 祥月
逃がしてはならぬ婚期へ母夢中 雪美
婚期もう男の所作を凝視する 昌男
まだ結婚早いと云うたが気に入らず 一鶴
ロカビリー婚期忘れた娘も叫び 山椒坊
娘の進学婚期逸するかと案じ 忠三
珠が先に嫁いだ開病記 忠太郎
ドライからウェットになる適合期 同
口軽い母を婚期の娘が叱り 光郎
婚期など問題にせぬ恋を持ち 魅光
後流いでもないわと婚期おくれた娘 魅光
バブ軽し婚期が匂う頃のいろ 紡毛
忘れぬ恋が婚期を遠くする 妖人
嫁さおくれもう家柄をひっこめる 蓑流
親類が娘の婚期責めに来る 淀月
宮様の婚期雑誌の種にされ 宗太郎
後れてる婚期易者の灯にすがり 兼治郎
あの頃が婚期だったと女中くやま どんたく
顔に自信あり過ぎ婚期素通りし 井蛙
夜遊びを母戒しめている婚期 豊年

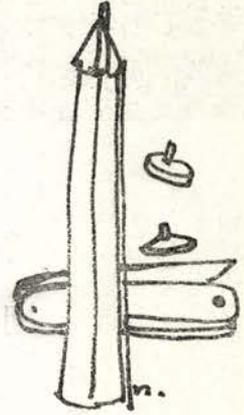
親が気をもむほど婚期ぐだわらず 愛鳩
大望を持つ身に婚期早すぎる むじな
貧しさが婚期を思ういとまなく 醉夢
同窓が嫁いで母をあわてさせ 代仕男
婚期など口には出せず編む毛糸 吸江
キ娘などと云われ婚期に遠くいる 弘朗
同窓会婚期逸したものの同士 雄声
和洋裁茶華にダンスも付け加え 生薑
生活を支え婚期を考ええず 孝風
見合写真また撮り直し撮り直し 恵二朗
一本立出来ないうちに婚期すぎ 圭木
斗病記婚期なくした愚痴も入れ 幸三郎
父と母娘見る眼が食い違い ひか平
自分で選ぶつもりで婚期とりはずし 淑滋
五客
一生に一度の人を待って老け 弘村
一筋の芸が婚期を振り向かず 九呂平
秘書として生き婚期を逸したり 義夫
婚期の娘あつて掃除が行き届き 十九平
共稼ぎならとOKする婚期 雪峰
人
七夕のように婚期をすぎた恋 史風
地
もう誰も養子の口も持つて来ず 圭井堂
天
折角の婚期へ父母が決めたかり 隆中

川柳雑誌社特製
書きよい 美しい

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇円
送料(一冊分)八円

柳 展 望



句 会

▼本社七月句会は七日(木)午後六時から難波高島屋西横バス停前未生会館(四階広間)で開催、一人でも多く出席されたい。▼南区医師会杏林川柳会(大阪市)は六月二十一日(火)午後七時半から南区三休橋南詰中島生々庵居で開催。▼コトヨ川柳会(大阪市)句会は六月十七日(金)午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪道信病院川柳会は六月十八日(土)午後二時から一階で開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は六月三十日(木)午後六時から難波の親和クラブで開催。以上路郎主幹出席。▼川維浜寺支部句会は五月二十七日午後六時から復活一周年・優勝受賞記念句会として諏訪森会館で開催、盛会であった。▼川維岡山支部句会は六月十一日赤岡山支部で開催。▼岡山電報局ゆめ六月句会は十五日法院居で開催。▼広島川柳句会第二例会は六

月十五日午後六時から広島駅会議室で開催。▼葦川柳句会は五月二十一日午後六時から国立高根療養所日本館で開催。▼明和研究会宇治吟行は六月五日(日)平等院鳳凰堂を見学、黄檗山万福寺で普茶料理を賞味、醍醐三宝院より京都經由のコースで行われた。▼熊本川柳初夏懇親句会は六月十九日(日)午前十一時より熊本太平洋デパート六階特別食堂で開催。▼川維大聖寺支部、加賀市橋立町川柳会主催の第一回加賀市川柳大会は六月十二日午前十一時から橋立町公民館で開催。句会終了後の懇親会では遠来の伊藤茶伝氏、前田義風氏らが交歓された。▼第六回愛媛川柳研究大会は五月二十二日潮風川柳社、今治市教育委員会の主催により開催。極めて盛会であった。▼川柳たたき(高知市)記念川柳大会は七月十日(日)正午から南はりまや町「寿し柳」で開催兼題、夕食・他人・赤字・モデル

・ビール各題三句、投句は七月五日までに高知市永国寺町一八、川竹松風宛。▼堺魚夜市川柳句会は七月三十一日(日)夜八時から南海線湊駅下車湊西小学校で開催、兼題夜明かし・よろめき・耳うち・夏休み・パンガロー堺川柳人グループ主催▼川柳はこだて百男記念川柳大会は八月二十一日(日)正午から函館護国神社社務所で開催、兼題格式・楽しみ・柔かい・才女・強気投句は百男封入の上七月二十日迄に函館市青柳町十七番館川柳社宛。▼岸和田川柳句会は七月十一日(月)午後六時より宮本町会館で開催、兼題旧悪・愛の巣・乱売。

消 息

▼山口麦彦氏(熊本市)は五月三十一日本社を訪問、路郎主幹や初対面の葎乃女史と歓談された。▼戸倉普天氏(兵庫県)は五月十日より夫人同伴にて東京を振出しに飯坂温泉、吾妻連峯ドライブ、仙台、山形へと歴遊され、上の山温泉に沢庵和尚幽閑中の茶室などの遺跡を見て二十日帰宅された。又、五月二十七日には琵琶湖周遊後、黄檗山万福寺の普茶料理を賞味された。▼若本多久志氏(西宮市)は五月二十日空路東京へ、帰路金沢に立寄るあわただし、商用の旅をされたが、新緑のすがすが

しさが印象に残った。▼須崎豆秋氏(大阪市)は六月十日胃潰瘍のため西下胃腸病院に入院された。何やら旅に出てどこかのホテルで泊っているような怪しい気持ちで句帖と鉛筆とが枕元にある限り退屈知らずで、川柳に感謝していますと。▼光好陽子さん(岡山市)の母堂山中つね代さんは五月二十七日胆嚢炎のため岡山赤十字病院に入院された。御全快をお祈り申上げる。▼山田季賢氏(広島県)は激務の余暇を見て五月三十日三段峡から十方山への登山を試み、古屋敷で一泊浩然の気を養われた。▼遠回り三段峡のコース行く。▼西いわを氏(大阪市)は六月十二日会社の慰安会で志摩半島賢島を見学。パールの地にふさわしい美しい海と山を觀賞しておられる。▼若本多久志氏(西宮市)の著「親ごころ子心」の記事が川柳人多久志氏の情報とともに五月十日付のハワイタイムスに紹介された。▼田垣方大氏(倉敷市)は五月九日二カ月の猛練習の甲斐あって普通自動車運転免許試験に合格、子供のよう喜んで居られる由。▼杉本一鶴氏(貝塚市)は肺手術後、喘息の発作や咯血、胃腸障害などにより絶対安静を続け、全身の倦怠甚だしく、誰の身体やらわかれぬ事さえあるが、作句することのみが唯一の生甲斐であり心の糧となっているとの便りを寄せられた。▼丸尾潮花氏(大阪市)は六月六日白内障手術のため日立桜島診療所に入院された。速かな御快癒をお祈りする。▼林葵丘氏(岡山市)は西大寺電報電話局業務課副課長に栄転された。▼尼緑之助氏(出雲市)は毎日新聞の高根根に二日に亘って「私の川柳」を寄稿された。▼友淵貴山氏(大阪府)は五月から白浜急行バス営業所へ勤務。▼岩垣日本村氏(大和高田市)は同氏所属の高田川柳会と袂を別れて新しく日の旗川柳会を創立、後進の指導に当られることとなった。「淡々とゆくわが道は晴れている」▼岡田夜湖氏(岡山県)は春以来黄痘に悩んでおられたが、六月岡山市立大学病院で精密検査の結果、肝臓硬化症と診断、目下自宅で臥床していられる由。▼越智一水氏(今治市)は今治地区労働組合協議会事務局長に就任、連日連夜の会議で休日も返上して多忙を極めておられる。▼江国幽谷氏(岡山市)は岡山電報局第二運用課長に昇格された。▼築山快夢起氏(ホノルル市)は古川麗花麗氏前山北海氏と共に、六月一日午後七時三十分渡米の途次ホノルルに寄航された足立春雄氏をホノルル空港に迎えられた。目印しの「川柳雑誌」を手にした博士に涙なく会え、カイ

マナホテルの日本座敷へ案内して

快談痛飲夜の更けるを知らず料亭の終業時間まで飲を尽くされ、不朽洞会員歓迎第一号と云うわけ、川柳を通じた温いものをひしひしと感じられた。▼八木摩太郎氏(堺市)は堺市支紙上に「市役所の思ひ出」を掲載された。「うれしくも利休の茶の湯わしが困」

▼故前田雀郎氏を記念する「前田雀郎文庫」が故人の郷里宇都宮市の県立図書館内に設置された。故人の蒐集された、文献の散逸を憂慮されて蔵書を保存されたものだが、将来は川柳・俳諧及び江戸文学の研究センターに充実に行かれるとのこと。▼八竹正柳氏(大



不朽洞 七時から南区三休
会から 橋南詰中島小児科
診療院楼上で開催。川維四百号
記念号増頁其の他の件について
第一回の打合せをした。

出席者 | 路部 生々庵・櫻・栗・梅里
・好郎・いわを・没食子・古方・紫青・恒明・
眞風子・多久志の諸氏

☆常任理事会 | 六月十一日(土)
午後七時から中島小児科診療院
楼上で開催。四百号記念行事に
関する諸事項につき打合せ九時
半散会した。①川維四百号記念
の九月号へ不朽洞会員の自選作
品集の発表、②支部の頁を設け
支部会員の随筆等を発表。③④
の投稿規定の詳細はお手許後報
⑤原稿の切は七月三十一日

阪市)方に六月六日午前十時半頃若い賊が押し入ったが、家人と近所の人の協力で間もなく逮捕された。▼片岡小風氏(布施市)は五月十八日貝塚市の国立療養所千石荘を全治退所された。

新刊句集・柳書

▼山村祐著「短詩私論」が一九六〇年五月二十五日東京朝日新聞鴨六ノ一三二九森林書房から発行された。天馬叢書として発売された川柳私論を第一部に、それ以後の文章を第二部におさめた評論集で川柳家一読の好著。B列6号二百頁、定価二百八十円、送料三十円。▼村上白雲著句集「微光微

塵」が昭和三十五年五月三十一日秋田市檜山九郎兵衛町三〇川柳あすなろ会から発行された。療養生活七著者、川柳に手を染めてから五年の著者の三百句が収められている。B列6号五十頁、定価百円送料八円。▼櫻井六葉著「2日2B」が昭和三十五年五月二十八日金沢市泉野町三三七五えんびつ発行所から発行された。柳誌えんびつの巻頭言を収録したもの。百二頁定価百円。▼櫻井六葉著句集「ねずみの目」が昭和三十五年五月二十八日金沢市泉野町三三七五えんびつ発行所から発行された。過去に作り散らかしたものを整理して置

きたい心から昭和三十年以後の句が収められている。B列6号百二頁、定価二百円。

転居

▼布部幸男氏(京都市)は京都市二条高倉西(電話5464)へお店は従前のまま。▼菱田満秋氏(大阪市)は左記へ転居された。大阪市浪速区元町三丁目二一四上田アパート二号室。▼片岡小風氏(布施市)は左記へ転居。布施市高井田一三二五光洋製紙KK高井田寮。▼川竹松風氏(高知市)は左記へ転居。高知市水国寺町一八。

正誤

▼前号七頁中段十四行目耕とあるは棘の誤りにつき訂正。(薫)

地オアノ島と北端のカワイ島はその禍を免がれたが、何分にも関係の深いヒロ市の事ゆえ、見舞に救援に当地市民、殊に日系社会(罹災者は日系者が最も多いので)の動揺混乱は二三日ではありましたが、可成りのショックでした。新聞で見ますと津波の災害は太平洋岸各地に及び、日本も三陸・北海道地方がひどくやられた様で人命や財産の損失は到底ハワイの比ではない様でお気の毒でした。あのヒロ津波のあった三日後の二十五日、津波再度襲来の警報鳴りひびき、下町からワイキキその他海岸低地のもの全部に立退きが命令され、又かというわけで、人心恟々一騒ぎしましたが、所謂 False Alarm と済んだのは何より。然しこんな豆粒みたいな島の事ゆえ何時どんな事故が起るかわかりません。決して好い加減には扱えない困った代物です。ヒロの災禍により人命の果敢ないこと、一生をかけて蓄積した財産が一瞬の間に流失してしまう大自然の威力、いろいろと考えさせられました。ヒロの川柳講読者であった提順吾さんも無事、その他関係者に異状ありません。御安心下さい。御返事まで。勿々。(六月一日)

飛・燕・往・来

一 曹乃原

★築山快夢起氏(ポルル市)より

この度の大津波災害につき早速御見舞頂き有難うございました。去る五月二十日日曜の夜南米ナリ1に起った地震津波の余波が僅か十四五時間の内に布哇群島を襲い、その最南布哇島ヒロは被害甚大、死者五十余名、負傷二百何十名財産の損失五千余万弗で、前回(一九四六年)に比して被害一層の様に、罹災者には誠に御気の毒、同情の外ありません。その次にひどかったのはマウイ島にて人畜の被害はなく、桟橋や海岸通り商店、住宅に浸水、約二百万弗の損害。幸にしてホノルルの所在

新刊紹介

▼市原便著随筆「口多し」が昭和三十五年五月一日大阪大学医学部生化学教室から発行された。A列5号二百六十二頁の好著。非売品



いちある句を創れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 六月旬会 (大阪市)

6月7日 午後6時

会場 未生会館

新安保批准をめぐって世は正に騒然。そんな中で静かに川柳するひとときをもつことはなんともありがたい。

会場はほとんど白一色の初夏風景だが扇風機もいらぬ涼風天国だ。まず古方氏の句評「一句に賭ける」(26頁参照)から席・兼題の披露にうつる。選者の後方の窓ガラスに点滅する紅色、うす紫色のネオンが背景となつてミナミの夜は美しい。待望の路郎主幹披露の最後の一句、その不朽賞賞権を、杉前南宗氏が拍手の中でしっかりと受けられた。(F)

出席者 路郎・一三夫・静馬・すゝむ・舟遊・摩太郎・圭井堂・水京・保美・文秋・井平・薫風子・一瓢・樹峰・麻風・古方・南宗・水香・進之助・梅里・没食子・凡吉・繁雄・三司・徹也・奈良子・水客・東天紅・紫香・いさむ・酔舛・十悟・吸江・敏明・柳宏子・正一・青風・茶仏・多久志・涼秀・清子・一栄・葉乙女・利男・漂月・月舟・紡毛・与呂志・

柳志・女・さぎす・満秋・恒明・庸佑
・阿茶・榮・梅志・月都・宏子・霞乃

兼題「温顔」 麻生路郎選

点のからい師の温顔が忘れず 花村
こんな嘘へ母は温顔崩さない 操子
悪友に父の温顔教えられ 忠太朗
温顔をくずさず心に触れさせず 花美
賽銭下口弥陀の温顔拜んどき 静馬
温顔に胸が迫って語にならず 茶仏
温顔も恐い師弟の潤柄 仙山
香煙がゆらぐ温顔生けること 奈良子
温顔へ言いそびれたり金のこと 萊春
温顔の生けるが如き除幕式 牧人
温顔と言えない程に瘦せ給い 一十
温顔の父代議士を嫌いぬき 日満
温顔のこの裡めと思えども 堰子
温顔で賃上げをきく気味わるさ 香林
鉢巻をとれば温顔の委員長 生々庵
娘一人へ温顔後を貰わない 一路
温顔にものを頼めば頼りなく 尚史
温顔を買われ議長席に着き 文秋
飲む程に飲む程に温顔長つて来 小石
温顔な子でマルクスの書をあさり 孝風
温顔の父を見つけた父兄会 昌男
温顔に似合わせぬ声へギョツとする 武助
チンチャンゴ着せて貰つて愚に還り 千尋
夫の温顔へ女房じれつたし 明朗
温顔が人事移動で効いて来る 徹也
核心にふれて温顔固くなり 雄声
温顔が薄気味悪しボスの顔 与呂志
温顔に無心あつさりことわられ 博也
人員整理を温顔ふみ切れず 恒明
温顔の誰も知らない過去のきず 鶴汀
温顔を押し一升買うて来る 客遊子
温顔のどこかきみしい老守衛 清勝

兼題「口止め」 若本多久志選

おとなしい面付だったから任し 史風
温しい顔やないのに乗り気らし みのる
温顔に一筋通るものを 阿茶
声かける迄もなく温顔くずれかけ いわを
温顔でじわりじわりと断られ どんたく
温顔の社長あつさり誠を言い 鎮海
温顔も腹の立つ日は立つのなり 三司
心まで余裕でたのか顔の相 裕邦
温顔を家族に見せず学者死に 一三夫
嫁の友達が来て温顔はころばす 白柳
温顔に接し五十の身があまえ 没食子
温顔に話題はいつか後のこと 梅志
温顔の老師イギリスから帰り 半歩
温顔の凡凡として愚を守る 晃
温顔のわりに無情な事を言い 南宗
温顔で今のは誰やと嫁へきき 路郎

兼題「湯上り」 市場没食子選

口止め料やっても子供母につき 阿茶
口止めを貰うたことまでみなしやべり 清子
口止めに飲ませ手土産まで持たせ 没食子
口止めのそれから頭上らない 恒明
コーヒ一杯で口止めされていた 葉乙女
家内には内緒ですよとつけ加え 進之助
口止めの手真似をちゃん見透され 茶仏
口止めかいつもと違う一級酒 吸江
口止めにキヤラメルもたまでしやべり 静馬
蔭口のあとから口止めして歩き 水京
口止めのビールは御意のままに酌ぎ すゝむ
口止めをするから喋る気にもなり 梅里
口止めをすれば男はつけ上り 摩太郎
廊下まで出て口止めの念を押し 三司
口止めのあは座敷を替えて飲み 三司
ゲンマンして口止め誓う赤い爪 裕邦
口止めもしいい噂も立ててはし 生々庵
このさきは口止め料をもらたこ 多久志
ボクットヘネジ込んでから口止めし

湯上りの髪を扇風機へ直とも 八九寸
湯上りのママミキサを回す音 花乃子
ほほほこのペビをタオルで持つて来る どんたく
湯上りへもう気の早い扇風機 蘭
湯上りへ御腹の空いた子が騒ぎ 十悟
湯上りの妻が動めに出る不運 敏明
湯上りの明日も働くコップ酒 柳志
湯上りのパパも覗いた冷蔵庫 保美
湯上りの女こてこてぬりたくり 東天紅
湯上りの身をもてあます一人旅 正一
湯上りをびびりくりさせた御用聞き 梅里
湯上りのクシヤミへ話まだつつき 舟遊
湯上りの娘女の線が出来 漂月
湯上りの姿支人と間違われ いさむ
湯上りへ月賦の風を受けて見る 正一

湯上りの洒落は仲居のものになり
 湯上りに按摩相手も旅の宿 舟遊
 湯上りになれば女もいける口 靡天郎
 湯上りへつこり笑うコマーシャル 利男
 湯上りの背中を孫が拭いてくれ 清子
 ずてきなヌード湯上りの妻でした 古方
 さっぱりと欲もおとした風呂上り 旅風
 湯上りふやけた足に蚊がとまり 吸江
 湯上りへ又 贗物の 顔造り 利男
 夜の灯字に誘われて風呂帰り 進之助
 湯上りのビール下戸でも飲みたがり 静馬
 湯上りを待たず一本空にする 圭井堂
 湯上りの二人でふれる青すだれ 紡毛
 湯上りの昼間歩くも 法善寺 漂月
 湯上りの膝へこぼした冷やっこ 三司
 湯上りの体へトクホンサロバマス 涼秀
 湯さめする程お化粧念がいり 多久志
 風呂桶を持つ深木の 洗髪 進之助
 湯上りのギョスを載せた名所図絵 梅里
 湯上りへ早よう座れと落口が待ち 井平
 湯上りの手で家中の鍵を閉め 若風
 一抱え抱えて女湯を上り 保美
 湯上りの背がべちやづくい客 一瓢
 湯上りがタオルのままで薪をくへ 阿茶
 湯上りのままで遅れた膳につき 没食子

兼題「女文字」 正本水客選

封切らず机に置かれた女文字 吉備郎
 よせ書きへ紅一点がかしこまり 柳志
 妬くのではないがどなたの女文字 三司
 何流かすらすららと女文字 茶仏
 遠筆な女文字に一寸やき 水京
 女文字御存じよりでも始め 圭井堂
 丁寧な走り書きなり女文字 利男
 宛名だけ四角に書いた女文字 茶仏
 折入って相談とは嬉し女文字 漂月

席題「カーテン」 松江梅里選

直筆で女家主から値上げ 圭井堂
 裏切って悔いていますと女文字 靡天郎
 いじらしい恋なり下手な女文字 一三天
 催眠の手紙が女文字で来る 夢虹
 女文字母の叱言が並べられ 葉乙女
 遠筆に氣立ても知れる女文字 文秋
 女文字妻の検閲受けたら どんたく
 一ト筆は妻も書き足すたい便り 柳志
 金のいる事は書きの女文字 涼秀
 遠筆に過ぎて冷めたい女文字 一三天
 地蔵さま女文字なるよだれかけ 瑞歩
 案の条中は来てるの女文字 十悟
 女文字の封書燃って手渡され 鎮海
 ガールフレンドから手紙ははからず 進之助
 K生と書いてはあるが女文字 一三天
 女文字ピント外れていくどし 花乃子
 餞別へ只一行の女文字 鎮海
 陳情の署名を女はそう書き 東天紅
 遠筆な保護者は何時も女文字 樹峯
 意外にも忠告だった女文字 永香
 あはらしい当て字も混ぜた女文字 旅風
 女文字一度許した大胆さ 一鶴
 イニシャルだけだがどうも女文字 文秋
 肝心のこと書いて来ず女文字 水客

カーテンのかけで唇ぬすまれる 一栄
 カーテンで団地の恋は仕切られる 利男
 カーテンにかくれいエエと云うつもり 保美
 カーテンをへだてて愛の巣を作り 奈良子
 カーテンの柄も姑は氣に喰わす 柳志
 カーテンの奥は別室と云うキャバレー いさむ
 カーテンを閉めて昼も寝るつもり 南宗
 カーテンの蔭で見合いのをぞかれる 圭井堂
 カーテンにろうけつ染の腕もみせ 文秋
 カーテンを替えて病舎に暮らさむ 舟遊

席題「やぶへび」 長谷川三司選

カーテンもとれと醜酌素っ裸 没食子
 臨終というカーテンは重くたれ 一三天
 カーテンで涙も涙も拭くやんちゃ 圭井堂
 ずりくりでカーテンだけを替えて呑み 醉舛
 カーテンの色も新婚らしく映え いさむ
 往込みが逃げてカーテンだけ残り 水客
 カーテンの白い女目をうつけし 東天紅
 カーテンでしきている素人の楽屋裏 靡天郎
 カーテンを引いて女の部屋となり 徹也
 カーテンにとまっていたハエの叩く位置 一三天
 カーテンの色から困地裏に位置 三司
 カーテンで隠せばのぞいてみたくなり 庸佑
 カーテンのかけにかくれたバスマスル 一栄
 婦人科はカーテン几帳のように吊り 阿茶
 カーテンもここは吉屋というモード 一三天
 カーテンで手を拭くとを見付けられ 水客
 カーテンを替えても夫気がつかず 柳志
 カーテンの蔭で裸の慌てよう 井平
 カーテンの蔭に拗むる背なを向け 梅里

やぶへびになるとも知らず又喋り 一栄
 下手なやきもちやぶへびになるまで 舟遊
 知った顔したばつかりにせおわれ 庸佑
 言わんでもいいのに己のゴロを出し 靡天郎
 やぶへびになつて訴訟は負けかかり 圭井堂
 小細工がやぶへびとなる決算書 敏明
 やぶへびを笑つて済ます腹が出来 紫香
 やぶへびになって二つちがおこらされ 多久志
 やぶへびになつてしてもおもしろう 古方
 敷蛇になるとも知らず顔を出し 水客
 言えはまたやぶへびになる税を呑み 文秋
 言わんでも良かった世辞が氣にたまり 柳志
 岸さんのつづいたやぶへびは大き過ぎ 醉舛
 やぶへびになつたと苦情持ち込まれ いさむ

席題「セールス」 吉田圭井堂選

敷蛇もよし禍が福となり 没食子
 やぶへびになるとは知らずにさいそくし 一栄
 やぶへびになつてしもて苦笑する いさむ
 やぶへびになつてしもて苦笑する 十悟
 やぶへびの電話で予定少し変え 葉香
 とつときの話がやぶへびだったとき 恒明
 お愛想に聞いたばかりに金が要り 水客
 やぶへびになりそう弁解やめにする 阿茶

品質優良
洗カペン先
 TACHIKAWA PEN
 大阪市東区常盤町一丁目十一番地
 立川ペン先株式会社



ビンゼム紙
 カワソ
 カワソ
 カワソ
 タチタチ

成績表掲げてセールス叩かれる
 セールスへ今日のネクタイはでける
 事なかれ主義へセールス肩がこり
 セールスは犬にも会釈して帰る
 予約だけ取ってセールス抜目なし
 引きこを引いてセールス又出かけ
 名刺貰うとまでセールスこぎつける
 傾会いをはかりセールスやつてる
 商談がすめばセールスもうおらず
 同郷と云うてセールス腰をすえ
 セールスのもう一押し椅子を寄せ
 親戚一巡してセールス棒を折り
 セールスの袈袢にまけて買つてやり
 セールスマン糖種もはめる加すなき
 セールスのこんなところある苦勞
 口べたがセールスマンでめしをくい
 セールスを鞭うつようにあるクツ
 口下手のセールス足で足で取り
 セールスに社運を説いてけしをかけ
 セールススマン上手に月賦組んでくれ
 セールスの成果が風呂の唄となる

旅風 徹也 水客 正一 いさむ 紫香 保美 醉舛 柳志 摩天郎 柳志 梅里 多久志 庸佑 進之助 庸佑 さざす 梅里 十悟 利男 徹也

口下手の夫縁談引きうける 泰
 お互に末っ子縁談すくきまり 青風
 縁談はみなことわつた様に云い 漣
 満員車老妻へ席がすくにあき 竜昭
 情ない話煉炭も消えかかき 葉平
 旅先の人のなまけの足袋を借り 薫風子
 せめてのなまけ辞表を出せと云う 文秋
 よく見れば指紋が出来ている手垢 梅志

川雑 にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

一万円庶民の手垢きらうごと すゝむ
 執念と手垢で紙幣も色あせる 晃
 ボン切れた時泥沼を意識する 保美
 どろ泥を天国にして河童すむ 満秋
 この泥に馴れた女の微笑なり 千尋
 この頃の子供大人を黙らせる 羊之介
 眷なのにこのごろさむい日がつき
 この頃はそこにいるかも云わず 慎太郎
 このころがよかつたなアと写真帖 舟遊
 早もて欲しいと迄は云い出せず 敏子
 縁談があつてこの頃落ちつかず 生薑 白柳

川雑 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

終電へすれ折を一つ 掲げ 十悟
 人形のように育てて自慢にし 晃
 親バカを子供の方が照れている すゝむ
 親馬鹿も人の事ならおかしがり 文秋
 風呂敷の結び目きつ子の使い 葉光
 定紋の風呂敷に遇うよい日なり 生薑
 風呂敷に鯛はみ出てるモニンシ 梅里
 風呂敷の柄で質屋に覚えられ 楚行
 風呂敷をたたんで女また 喋り 山椒坊
 チューリップママも一度はあの姿 喜仙
 逆光を浴びて窓辺のチューリップ 亜純
 する事をしたに意外な眼で見られ 舟遊
 金星を挙げて意外な顔で降り 耶子
 真実を意外だと云う顔で聞き 卯三
 母の過去意外な恋にいろどられ 奈良子

川雑 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

お祭へ街の毛虫が奉賀帳 六童子
 社で毛虫外で人氣のある社長 正一
 虎を買う参詣客がトラになり 清
 氣のついた時はトウの子まで盗られ 柳宏子
 表札へ巡査部長の名も並べ 井平
 はつたりは間口の広い店を張り 白柳
 みにくさをかくす化粧がドギツキ 守信

本社句会 (六月現在)
 金出席者

- 多久志・柳宏子・奈良子・
- 満秋・薫風子・紫香・一三
- 夫・舟遊・文秋・井平・静
- 馬・阿茶・木堂・庸佑・栗
- ・圭井堂・すゝむ・旅風・
- 三司・十悟・宏子・霞乃

各種毛織物卸



加賀纖維株式会社

大阪市東区南本町二丁目一番地

川雑 淀川支部句会 (大阪市)

木村木堂選

合槌をうった許りに腰を据え 清子
 また同じこと聞く合槌をうるさがり 文秋
 合槌も急ぐときには上の空 水京
 合槌を共にしやべつた事にされ 一栄

なまけくせ寝覚し時計股にいれ 句念坊
 月曜もついでに休むなまけくせ 三舟
 ボマードで光る頭のなまけくせ 陽子
 金たまり出してなおつたなまけくせ 涼秀
 パチンコは負けた事ないなまけくせ 永香
 赤線の水になじんだなまけくせ 一鶴
 ネットタイを変えてふりきるなまけくせ さざす
 なまけくせついて横道ふみはじめ 幽谷
 定食を取ってと末っ子譲らない 東洋男
 定食で上役お茶をにごす肚 若菜
 定食を持てあまして二日酔 木堂
 連休は他人事にして道路掃き 灯子
 科学者は月への旅を急がされ 花村
 アメリカへ長屋内職急がされ 清生
 うかつにも売り急ぐ肚見すかされ 香林

川雑 京都支部句会 (京都市)

お客さんへおあいそすれば猿がきわいでる 千潮
 桃太郎の躰で犬猿仲がよい つる子
 悲劇を見ている女の顔を見てる ゆきら
 いつからか喜劇の巡査髭がない 烏雀
 落款の値打墨絵の輪が一つ 親生
 お地藏さまげんげの花の輪がしおれ 紫蘭
 輪ゴムパチンとつれない女 山紫楼
 頬骨と頬骨の間に運強き鼻 晴芽
 頬骨にあんだ理屈が多すぎる 司郎

不朽洞賞受賞者 (六月現在)
 栗・いわを・柳志・青風・保美・南宗
 天位受賞者
 ①阿茶②夢虹③青風・牧人・一三夫
 ④栗・水断・与呂志・好郎・和栗・
 静馬・良子・奈良子・いわを・梅志
 ・紫香・狂二・すゝむ・柳志・多久
 志・舟遊・晃・淡舟・正一・梅里・
 保美・日満・水客・敏明・三司・旅
 風・南宗・文秋・井平・徹也・

田中烏雀報

頰骨を草臥れさせてガムを吐き
バスガール絶景ですと押し付ける 和三部
正夫

川雑
ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

一言がすぐ問題を呼ぶ人氣 北 海
問題にされぬ同志で仲がよし 魔法麗
問題を追求すれば壁があり 浅 草
犬が吠え子が泣き日曜寝て居る 風 草
日曜日両手ひろげて孫が来る 押 山
この日曜またゴルフかと釘うたれ 快夢起
大見得を切って問題らしくなり 晚 舟
問題はこれさ指で輪をつくり 柳 葉
問題の解決二人を添わずだけ 泉 木
あの夜道問題生んだ二人連 周 防
問題となつて映画の人の波 青 風
問題にされぬ下役ホラを吹き 旋 風
日曜の天気寝床で 尋ねて居 銀 水
日曜に心の塵をまた払い 紅 茶
安息日酔って失敗くり返し 緑 星
日曜のプランへ妻は忙しがり 紅 涙
脛に傷あり問題を伏せたがり 須摩子
問題はそれなんだよと腕を組み エス子
日曜は天国ですとゴルフ後家 平八郎
一人居はたまの日曜淋しすぎ 内 海
日曜は遊ぶがためにある 如し 惠津子
ネエあなた日曜でしようかと酌きこぼし 峯 円

川雑
浜寺支部句会 (堺市)

川村好郎報

前身を買って顧問にすえておき 吸 江
前身が大坂へ来てはばれかかり 徹 也
前身は低園あたりかうば桜 東天紅
前身は云わず家改燭よく動き 好 郎
前身の名刺に未練まだ残し 裕 邦
キャバレーで前身を聞く野暮な客 末 一

前身のひがみもあつて言いまわれ 圭井堂
前身をもつともらしい嘘で述べ 南 宗
お酌する時前身をチラと見せ 保 美
前身をそつと鏡にのぞかれる 雄 声
前身がばれて女は強くなり 徹 也
前身は乳母だけ知つてる目鼻たち 生々庵
天井にマリの型あり子は達者 貴 山
俄雨やんでもてくる蛇目傘 底 流
床屋ではとらず風呂屋で釣せり 狂 二

川雑
明和病院支部句会 (西宮市)

西尾青一路報

お土産のびつくり箱で子を泣かし 留 三
手土産をもらうてからの弱身なり 舟 遊
団体が列を乱して 買う土産 寿 栄
きり身祖母の土産も乗って居り 六 光
手土産のすて二次会ごまかす気 明 美
お土産のひも解く手元を子で囲み 弦 月
名産店の土産を出してすましてい 雅 夫
お土産屋どこも本家のソレン掛け 正 雪
お土産が未だ転つての事故現場 山 友
瞞された顔して土産もらつとき 球 絵
核心をつかれた事情慌てだし 泰 舟
その間の事情刑事のように聞き 三 舟
逢うことも事情の許す範囲なり 千 尋
その事情れば責めは吾にあり 東 雲
生立が事情ある娘でゆきときどき 芙 路
御事情によってはとは貸さぬ肚 榮

川雑
備前支部句会 (岡山県)

三村柳風子報

横車とは知りつつも押し見る 草 二
横車押すのへ先に 意見きき あやめ
横車押す父親に似て 育ち 博
横車入智恵されただけを 言い 三六
横車押さない今日を不思議がり 秋 月

横車虫の居場所が違つてい 柳風子
横車押すのが隅へ座つて居 水 仙
しづちゃんへ医者も往診したから 伊久野
此の世では使わぬ金を貯めて 快 美
しづちゃんの叔父が鉛玉買つて 清 春
簡素化をすればしづちゃんも 正 州
しづちゃんの財布は長い紐が付き 良 蔵
どさくさの長屋へ春の雨がもり 一 声
どさくさを逃れ二人の歩が揃い 真 奇
不可斐ないのがどさくさへ来て坐り 久米雄
せつかちの電話の話喰い 竜 泉
せつかちの電話の話喰い 竜 泉
せつかちの遺品前歯のちびた下駄 美音子
せつかちの下駄をはきはきバンド締め 芳 月
せつかちを妻と靴があとを追ひ 幸 仙
ひな祭親の懐子は知らず 明 良
片言の可愛さ一家を春にする 誠 司
片言が言えて出勤見送られ 万 女
東 岸

川雑
鳥取支部句会 (鳥取市)

河村日満報

坐つても寝ても淋しい独り者 天保鏡
湖山長者扇一つで湖とする 秀 和
独り身とも云えず断り口たたく 登代秋
湖底から学説変える化石が出 辰 春
独り身の頃はどサービスしてくれず 由多香
伝説の湖商魂のホテル建ち 天邪鬼
独身ということにしてパリのすみ 一 机
独身よさらば借着的のモーニング 星 影
メートルで買つて鯨で 餓いれ 三 歩
独身の気安く転勤命ぜられ 多可志
こんな小さな針がとらえた震源地 若 人
目測はさすがぐるわぬ材木屋 耕 民
風速計上つて測候所も暑く 湖 山

川雑
岡山支部句会 (岡山市)

兵田久米雄報

故郷に帰るたんびに友が減り 半 翁
許すとは云わず故郷からの餅 鈴 坊
ひやかしが多く金魚の生あくび 鮫虎狼
ひやかしももう効きません 大年増 一 声
厄除けの札の真横で子が生れ 久米雄
老骨を故郷の山が抱いてくれ 麦太楼
故郷へ御無沙汰をしてよく儲け 矢寸志
お流れをなどと上手に催促し 幽 谷
自炊する男の世話をやきたがり 東 岸
ひやかしを待つとは悲し厚化粧 香 林
秀麗な魅力に富士の生れつき 万 女
札東の魅力ねこなで声になり 陽 子
口下手のチクリ急所をさす皮肉 葵 丘
雨蛙のコーラスもよし故郷の 七面山
都市計画厄除け地蔵が邪魔になり 素身郎
厄除けのお札を貼つてすむ家相 若 菜
恩給を貰う年には故郷に 仁 斎
催促の云いわけ昨日きめておき 九 坡
故郷に近い出張引き受ける 美音子

川雑
広島支部句会 (広島県)

こりと痛みに
サロンパス
久光兄弟株式会社
東京・佐賀・大阪

平田越舟報

うち中の風邪居候から貰い越舟
指切りを果す玩具店に立ち二三夫
風邪ひくなど案じる母のいまはなし
昌幸
すり切れた表紙で辞書はよく仕え
美文
店頭表紙買われぬまま汚れ吐川
新薬に負けない風邪が又はやり上利

大聖寺支部句会 (石川県)

野村味平選

友情は学童の風船で結ばれる美代
来るところまで来て友情が胸を打ち
北聖
握る手に友情こもる血がかよひ
素百々
土産店乙な写真も見せられる久雄
お土産の札を忘れた頃いわれ酔羊
敬よんだ土産が足らぬ子沢山光郎
これがよいコッソは土産の荷にならず
味平

米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

口止めの酒に不安をふと感じ無開
口止めの要なき人生平社員一机
口止めをされたと妻に伝える子三舟
口止めをしてから女バフはたき愚球
きめられた晩酌なめるようにほし
幸子
晩酌の燭へ父ちゃん帰宅せず
美喜江
晩酌がほどよく廻る暮しむき節枝
禿がよい白髪がいとゆずり合ひ吾柳
給料はどこに行つたら源泉票蛙眠子
晩酌に消える内職妻つづけ鶴丸
一日の汗晩酌が忘れさせ素瓢
晩酌が嫁と姑を友にするユリ子
殊の値が上り晩酌機嫌よし雄々

小松支部句会 (石川県)

伊藤茶仙報

仲人も産婆も兼ねる村の女医
光威智
魚屋の二階は飲める軸をかけ城南
堪忍堪忍奥さん負けて勝つを知り
きみ子
堪忍がならぬと上げた手の仕末
美和子
別室の気楽さ小説読みふけり吉枝
別室に呼んで因果をふくめられ
みどり葉
別室を子らに与えてやる新居生風
邪魔者のように別室当てがわれ
宗太郎
別室のふす間両手で閉めてゆき茶仏
親馬鹿を侮るように子がのびる
たつ路
子の親になって親馬鹿よくわたり
多恵子
衣食足る中に浪費の子をかばい
千太郎
そうですわでもちの子は違ひそう
貫風

弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山選

残業の疲れを慰やす子の寝顔満天
倦怠期へ残業と云う日が続きあきら
残業の管が機嫌の千鳥足金平
残業をだしに今夜も飲み歩きとし子
今日もまたデート残業気をもて
栄道
残業の疲れを慰やすコップ酒典膳
残業のまなこに浮ぶ子の寝顔藤沢
残業の夫を新妻ちよつと焼き猛童
残業と云う手は古い妻の前賢也
残業と電話しといつてパイを持ち
あきこ
残業も予算に入れる共稼ぎ珠美
残業して妻に買わせる電気釜益子
残業へ妻の憎悪の目が光り信治
残業の疲れを慰やす風呂加減腎菜
残業のハンマーも軽いマナービル
文舟
残業を目あてに焼鳥屋が並び義風
子に夢をたくして今日も残業し
吐月
残業は休みがわりと経営者無名一
残業がつづき段々殺気立ち無名二
残業の窓からネオンが誘いかけ
漢太

残業の肩を小さな手が叩き
仙人坊
残業へ課長敬礼して帰えり順湖
父となる仕合せ残業苦にならず
幸堂
残業を嫉妬電話で確める美沙
日曜と云うのに社長の小唄会
敬太
日曜も朝寝の出来ぬ共稼ぎ
桃子
日曜日養子田圃で精を出し
順子
日曜を課長野良着で指図され
只世
日曜のブロンヘ不意な暮打ちが来
あつき
日曜のない一生を土に生き
天童
田舎弁を出すまい舌がもつてい
静湖
予定日を田舎の母にだけ知らせ
幸子
田舎への土産にちよつと浮気をし
登仙坊
田舎ばかり褒めて家出の娘を帰えし
秋月
屋号でも郵便の来る田舎町
南敏
すすり泣き嘘と知りつつ許してい
杏
すすり泣きとめる元氣も別れ
たつよ
すすり泣く娘へ再婚を進めかね
岡甫
すすり泣く妻に結局牛耳られ
竜児
もうこれで逢わぬ覚悟のすすり泣き
喜染
夢にさえ嫉はすすり泣く運命
賤女
肩の手を肩で払ってすすり泣き
生薑
すすり泣く声に読経が湧えて行き
ごん太
鬼のような女房にあつたすすり泣き
七面山

木次支部句会 (鳥根県)

藤井明朗報

新婚の部屋へ楽しい灯がともり
駄句案
新婚へたずな締めつつゆるめつ
栄治
退屈が退屈を呼ぶ将棋盤
鶏生
退屈が作った庭の花が咲き
清泉
敬の無いオモチャに子供退屈し
清夢
見舞客すぐ直るような事を言ひ
子迷
冗談も言えて全快近くいる
明朗
全快はよし同病者にすまない気
迷調子
平凡を愛して妻の生欠伸
勇児

名古屋支部句会 (名古屋市)

野田一念報

風当り猫までタンスの蔭に逃げ
夢丸
お互に最後の菓子に手を出せず
随田
人生を短命にした借用書越鳥
連休の最後は金の事でもめ
千代春
目ざましへ明日の人生信じきり
千種
ビール半分残し最終飛び乗った
不二郎
人生を行けど行けども茨道昇茂
母の里八十八夜で種をまき
喘雲
人生のすべてを子等にかける母
千古
麦かりの頬にちよつと初夏の風
明一水
最後だと云つてはくれる母の金
文鳥
人生も白髪と共に欲が減り
千明
娑婆の風親のない子に強く吹き
いさむ
やるせない胸をくぐる初夏の風
一念

大阪通信病院句会 (大阪市)

橋本幸男報

ローマンス事件になって村平和
春雄
病院の事件患者が逃げただけ
幸男
満員でもみくちやにされ
淘られて来
方正
ゴルデンツァイム満員へまた切符売り
ハナ子
ラシニアワー尻押しだけにやとれる
竹莊
色も香も乳のまるみも十八九
風船堂
血色は正直ものと病みて知り
けい女
血色の話がいつかエロ談義
露児
血色を見ただけ涙もうこぼし
愛論
紅肌へ浴場血色引立たせ
竹志
恋病血色近も悪く見え
康彦
就職が顔色に出た嬉しい日
宏子
十代の血色まぶし春の日に
史葉

血色の悪き血を流る生活苦 草右
路郎

杏林川柳会 (大阪府)

裏切りも予定に入れて票をよみ 一伸
政治家のような奴じやと裏切られ 瑞枝郎
後継に気がぬしいい六十路越し 路文
寝返って秘密を種にゆすりに来 阿茶
後継をねらう眼と眼がもれ合い 小石
半端者扱いされて発奮し 一哲
裏切ったつもりが敵の網に落ち 生々庵
おとんぼへつがす望みをかけ死に 腹乃

南海電鉄川柳会 (大阪府)

社内誌の隅で上役ひねられる 徹也
社内誌で知った社長の年と顔 武助
社内誌で見れば一かど政治通 雄声
勤労意欲盛り立て社内誌役が済み 貴山
社内誌に労組幹部目角たて みなつき
社内誌に活字になった自分の詩 句念坊
一通り書けば社内誌いきつまり つとむ
社内誌へ庭の広さも入れて撮り 宏子
社内誌で社長との距離近くなり 圭木
社内誌で見れば社長も二段うて 路郎

帝化川柳会 (大阪府)

谷沢好祐報

弔いに保険の金が身に泌みる 福水
美人には弱く保険にはいらされ 孝夫
二十年の保険満期が四十円 風柳
保険では打てぬ注射と教えられ 雄水
保険屋は妻にまかせてひげを剃り 晴暉
番犬と馴染みになって保険でき 真砂老
二三日経って根を掘り葉を掘られ 京一樓
新婚の昔にふれて妻は妬き 雅堂

明和研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

ふるさとの駅前にはよしいはり鳴き 甲子朗
駅前で土産の義理を思い出し 好祐
駅前で候補が何か言うと思った 九紫
駅前の食堂素うどん受付けず 蒼芒

一人して話す野心に酔うている 弘平
野心家があんな女と恋におち 弦月
見かえしても気の野心打明けず 言也
夢しまう小函少女の金の鍵 正司
考えておけとガチャリと鍵の音 太路
鍵かける生活にあきた旅に出る すむ
スキ焼へ仲居の世帯ずれた酌 梅志
もう女世帯を持った鯛買う 舟遊
世帯持つ人が一円拾うなり 満秋
大阪の橋一つ消え二ツ消え 旅風
地下足袋を洗って架橋の日を祝い 寿栄
死神の橋のたもとへ来てはなれ 夢虹
橋の下ここに人住む煙をあけ 六竜子
旅の橋水のきれいな川を越し 杏花
孤独の日椿ぼたつと白く落ち 球絵
病んでいて椿の散った音を聞き 菁風
紅椿目白しきりにキッスする 大丘子
お別れに花かんざしの白椿 一杯
椿紅し火を噴く山の山の裾 薫風子
寒の灸庭の椿へ目がいかず 喜甲
笑わせるだけの喜劇の味のなさ 庸佑
泣きことも勘定に入れ笑わせる 半歩
はねてから笑い直している喜劇 柳志
後味を残して喜劇の幕が閉じ 千尋
老夫婦笑い求めに行く喜劇 北人

コクヨ川柳会 (大阪府)

口下手はいいづちだてて用を足し 理休
口下手でつい本当のことを云い 柳波

葦川柳会 (松江府)

田中妖人報

割勘は身体でかくして小銭出す 龜心
割勘を女の子だけまけてやり ぼたる
花見より割勘が気にかかるなり 照夫
花見客棧の外は花でなし 傍石
恩人とその場限りの手を合せ 狂史
恩人に肩寄せて心暖まる 柳応

倒産のインクの青さ目にしみる 酔歩
いさり火の明滅見送りから戻る 大鳥
インクの香しき匂集のページ繰る 章道
見送りに来たライバルと手を握り 舞吉
見送りへイミテーションの笑顔で来 鶴丸
牛の歩みにも似たる人生五十年 祥月
菜の花が牛のまなこに写ってる 亜輝坊
無事今日も終えた夕陽の牛の艶 まき子
生水は呑むと見送る祖母は云う 鵬人
牛の眼にゆっくり流れる雲も春 草魚
牛のごと酷使されるも嫁の座に 稻子
針使う娘の溜息恋と知る 英夫
農民の溜息米価まだ低し 天痴人
惜別はホームの尽きるまで走り 妖人
スキャンダル二階の部屋を貸してから 三又路
みのらざる恋と知りつ鶴を折り 二二子
恋知った娘素顔が生々と とし子
テレビつけても二階借りまだ続け 久米男
打ち明けてからの二人のはがらかさ 八雲
燃え果てて恋は空虚なもの知り 幸三郎
ひとの恋世話しておれば独り者 雲南路
日本の溜息三池の同士うち 一生

富柳会 (富田林市)

阿部柳太報

金おくれ委細は文に下宿より 周一
蜜月のいで湯の宿へすぐかえれ 増治郎

なつかしの母の面影夢だった ぶじ
夢みたいなうまい話にだまされた 克忠
子に夢を託して今日も職に生き 紅月
恋人と逢う喫茶店隅で待ち 三次
情死今恋人の名を呼びつづけ 六竜子
P.T.A.招待券で儲ける気 カズエ
母ちゃんが招待される娘の節句 川谷
広告も父帰れとは哀れなり 柳太
広告と子供に勝てずまた買わせ 正博
決心をしてから女強くなり とも子
頼まれて罪な決心さす女将 摩天郎

たけるべ川柳会 (岡山県)

野々口美舟報

電報の声に庖丁さげて出る 秀波
心中の電報温泉宿から届き 牛骨
弔電へ又思ひ出を新たにし 敏子
ダム底になる古里を取るカメラ 只世
連休がすんでしまつて青い空 一喜
連休に財中の軽い味気なさ 素古平
靖国へ行く団体へ席をあけ ちとせ
団体を二つに分けた交又点 賤女
新聞の誤報は隅に小さく載せ 喜桑
電報がたばねられる御盛会 山彦子
三面を始にきかせることもあり 美舟

大萬

梅里の店

酌よし 千日前大劇裏
TEL②二七〇
味よし アペノ橋近地下
TEL⑦〇一四七

★大万川柳(第百十三回)を募る
兼題「朝寝」路郎先生選
締切・七月十五日 五月以内
発表・七月廿一日 (富田林市)
投句先 阿倍野区松崎町三ノ〇
大万川柳会宛

★ ★ ペンの散歩

▼新安保からむ6・15事件に各紙が共同宣言を出すなど、韓国、インドなみにあつかわれるにいたつたことは、なんとしても残念なことだつた。
▼「名句と難句」は次号あたりからと思つてゐるが先生もご多忙である。
▼東野大八氏の「沙漠の中の英雄」と富士野鞍馬氏の、「赤染衛門と闘防内侍」は、六月号を飾つていただくものであつたが、結果的に

はわたくしの責任から両氏にご迷惑をかけたことを深くお詫び申し上げます。ために東野大八氏の無休掲載記録が前号でストップしたことは、なんともお詫びの申しようがない。
▼尾崎方正医博の「海水浴と耳疾患」は、ご家庭必読のページである。新進早川清生氏の筆は大家に迫るものがあり、わが社の執筆陣は花やかだ。小石、若菜、梨花三氏の「娘・妻・母」は久しぶりの女流作家のページである。8月号にも「句評リレー」が待機してゐる。

▼四百号記念の企画が着々と進んでい。ご期待ください。(一三二六)
★7月の会 川雑支部
★塚句会：3日(日)一時半、題、夜店 赤岡山支部

・新米・秀才・所、堺市九間町山ノ口、八木摩太郎居★字部句会・10日(日)一時五十分、題、ヨット・窓素
・小説・群衆・所、厚狭駅官舎、国弘
・半休居★明和研究句会・10日(日)一時、題、都会・人妻・金魚・所、阪神
・公民館★倉敷句会・2日(土)六時、題、冷蔵車・せつかち・自由・面影・所、水島弥生町四の三、榎原一善居
★玉造句会・13日(水)七時、題、ムード・へそ曲り・松葉杖・所、大阪信用金庫★京都句会・16日(土)夕、

募るを廣告見舞中見人交柳

八月号へあなた
の暑中見舞廣告を
★一口金二百円。幾口でも申し込んでください。
★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。
★一口分は五分の一。段組三行。
★原稿締切は七月七日着便
★広告料は前金のごと(郵券代用でもよろしい)

題、乾き・楽園・陸言・所、四条繩手仲源寺★にしたり句会・17日(日)六時、題、かび・ショック
・怪物・所、玉出新町通一ノ一一、後藤梅志居★阿倍野句会・20日(水)題、あぶら汗・格下げ・サイン・所、旭町、金塚会館★南海電鉄句会・28日(木)六時半、題、家族券・試験・疲れ・所、難波
・親和クラブ★弓削句会・月末〆切、題結婚・洗濯・宛先き
前号通り直原七面山居★淀川句会・4日(月)六時、題、口

川柳雑誌社

先・医者・紙くず・所、東淀川郵便局
★岡山句会・9日(土)二時、題、扇
子・お人好し・湯上り・蚊帳・所、日

大阪一名古屋 2時間27分
ノンストップ

近鉄特急

大阪上本町発	7.00	8.00	9.00
	11.00	13.00	15.00
	17.00	18.00	20.00
近鉄名古屋発	7.25	8.25	9.25
	11.25	13.25	15.25
	17.25	18.25	20.00

ほかに 大阪・名古屋連絡
伊勢ゆき特急運転
座席指定 特急券
求めは 乗車の5日前から

近畿日本鉄道

ビールはアサヒゴールド

親ごころ子心

価 150円
送費24円

若本多久志著
麻生路郎序
川柳
「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中
から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘
つて根気よく拾い蒐めたのが本書である。
登録された柳人三百余名、集句二千余は親
と子の愛情が如何に深いものであるかを知
ることの出来る、実に有意義な書である。
大阪市住吉区万代五丁目二五番地
川柳雑誌社
阪神口座大阪七五〇五〇

printed in Japan

募 集

課題吟募集

- 思いやり 千句以内 若本多久志選
- 空箱 千句以内 富岡淡舟選
- 道ぐさ 千句以内 野村味平選
- ジョッキ 千句以内 中島生々庵選
- 目ざまし 千句以内 福田安夢選
- 一人 千句以内 那谷光郎選

每号募集

- 近作柳樽 (雜詠廿句以内) 麻生路郎選
- 川柳塔 (雜詠十句以内) 北川春巢選
- 文章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選

投稿規定

▼投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼「課題吟」は誰でも投稿が出来る。
▼「川柳塔」の投稿は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌

第三十五年 第七号
定価 七〇円 (送料四円)
半力年 四四〇円
一力年 八四〇円
昭和三十五年六月廿五日印刷
昭和三十五年七月一日発行

川柳雑誌社

発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区万代五丁目二五番地
電話 大阪 六〇八一
郵政口座大阪七五〇五〇



故

前田雀郎先生案
麻生路郎先生御推薦

川柳趣味浴衣とのれん

浴生地は極上細真岡地 紺地に白で模様の
図案は柳翁及び柳多留の編者吳勝軒可有
及び武玉川の点着慶紀進三翁の雅印を応
用松坂屋の佐々木先生が描かれし逸品で
す。

東京都中野区鷺宮一の八四

阿部佐保蘭方

川柳趣味普及会

一反九五の四・薄黄白田
一枚一八〇田・深黄八田

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

7月号発売中

130円(〒12円)

特集

白い砂糖に黒い影
米国の冷凍濃縮ジュースはなぜ伸びたか

◇
蔗糖脂肪酸エステル of 性状
ビタミンB₁ of 性状と利用
清涼飲料水の香料(その一)
重合燐酸塩の使用状況(座談会)

◇海外情報 ◇特許告知板
◇意匠ニュース ◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・酒類・添加物

大阪市北区 本町5丁目5番34号 電話345231-4 食品と科学社 大阪6702番

K.C TEX

ケー・シー・テックス



株式会社越田商店

本社 大阪市東区箕野四丁目 TEL ②-4573-6 番
東京支店 東京都千代田区神田豊島町四番地 TEL ③-7886 番
一宮支店 一ノ宮市花園通り二丁目 TEL 一ノ宮 ③3919

麻生路郎先生著

川柳とは何か

一川柳の作り方と味い方

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもの
もろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短
詩型、それは伝統的であると共に常に革新
的であるその川柳がいかんして發生し、経
過し、今日に至り、将来に動くか、しかも
その作り方は、味い方は——以上を最も
明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる
著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

送価 二五〇円
三三〇円

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

昭和廿二年七月一日 第三編集物部可
昭和三十五年七月一日 発行(毎月一日発行)

編集 兼
発行印刷人

〒542-0202 発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉区西田町四丁目五番五丁目二五番地 電話大阪六〇八二

所管口東大阪七五〇五〇番

定価七十円(送料四円)

お洒落の決め手

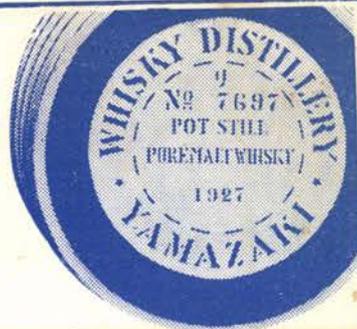
服飾研究の専門家は「まず型くずれしないこと」を大切なお洒落の決め手として挙げています

「東レテトロン」はハリがあるので申し分なく軽く着られます。シワになりにくく、雨にぬれても、洗っても、ズボンの折り目が消えないブリーチ性のすばらしさは、もう評判のとおりです。柄もグッと豊富な「東レテトロン」で完ぺきな洒落を楽んで下さい



Toray
Reg. Trade Mark

東レテトロン
EASY CARE / 手のかかるないせんい
紳士服・替ズボン
東洋レーヨン株式会社



万人
その名を知り
万人
その味を賞す

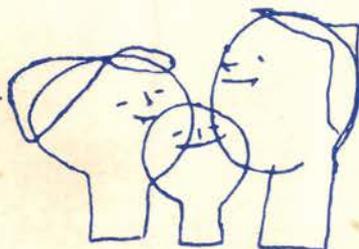
世界の名酒

サントリー

オールド 1,600円・角瓶 1,250円

洋酒の寿屋

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ⑥ 551-2

四国への
小松島



ビジネスライン

毎日 3便 わずか 4時間

▼ゆき	なんば発	和歌山港発	小松島着
(1)	8.00	9.30	12.10
(2)	12.15	13.40	16.20
(3)	17.30	19.00	21.40
▼かえり	小松島発	和歌山港着	なんば着
(1)	8.00	10.40	12.03
(2)	14.20	17.00	18.28
(3)	17.30	20.10	21.39

のりば 大阪なんば

南海汽船